
学生探偵 碓氷遼馬

ジャン・レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学生探偵 碓氷遡馬

【Nコード】

N3220L

【作者名】

ジャン・レモン

【あらすじ】

大学三年の夏休み。

俺とツレの佐久間^{サクマ} 拓也と神栖^{タクヤ} 弘矩^{カミス}、幼なじみの御原^{ヒロノリ} 茉莉は^{ミハシ} マツリは、割りのいいバイトとリアル大金持ちの豪邸訪問という遊び心を胸に仙台市の辺境にある籠鳥山に10日間のハウスキーパーとして招かれた。

俺達の雇用主である水菱一族が続々と集まり、優雅な避暑と権力

争いの幕が上がり、それは思いがけない事態、当主、水菱 宗継の失踪という形で急展開を迎える。

これは、失踪か誘拐か、それとも殺人か。

俺達と同時期に雇われたもう一人のハウスキーパーがとった行動とは？

作者にとって初めての推理小説。

へボにならないように頑張りますのでよろしくお願いします！！

イレギュラー達の日常（前書き）

はい、やっちまいました。

ファンタジー作家の真似事しかしたことない人間の書く推理小説がどのようなものか、皆様生暖かい目で見守ってくればありがたいです。

イレギュラー達の日常

さあさあ、楽しい楽しい演劇の幕が上がる。演出家の設定を飛び越え、配役達はセリフを忘れる。舞台の大道具が勝手に動き、観客すらも入り乱れ劇場の混沌は誰にも止められない。

機械仕掛けの神は知らぬ存ぜぬのシカトぶり。

かくして動き出すは、作者すらエピソードが分からないトンチキ喜劇な悲劇の応酬。

ネズミが走り、引つ掻き回す狂騒劇の終演は、如何様になるものか、劇場の外から楽しもう。

“とある真夜中の呟き”より抜粋

「あゝ、なんか面白いことねえのかなあ」

山々に囲まれた土地柄のおかげで火に炙られたフライパンよろしく日々容赦なく気温が上昇中だ。

大学内全面禁煙という人種隔離政策のおかげでクーラーの効いた室内から追放された俺たち愛煙家三人は、近場の駐車場で隠れるようにタバコとコーヒーとアイスを持ち寄り明日から始まる夏休みの計画を話していた。

「面白い事って、例えば？」

左の木陰に座った同級生、羽佐間 拓也（ハザマ タク

ヤ）が自分も探してるけど見つからないから教えて、というように聞いてきたが、あいにく俺も目下搜索中だ。

「……思い浮かばない。バイトでも探すかなあ」

「今から？どこも募集終わってんじゃないか？」

拓也は俺より一つ年上。精悍な表情が印象的だが、それでも幼さ

がまだ少し残る童顔でイタズラ小僧みたいな奴。

三兄弟の次男坊で、いつもツルんでいる仲間内ではまとめ役的なポジション、ついでにムードメーカーその1。

どことなく周囲を和ませてくれるありがたい奴だ。

「だな、つても夏休み中暇人してるのももったいない」

「海いくだろうし、飲みにもいくだろうから完璧な二トどときついだろうな。地元で働ける場所ないか？」

こんなふうには状況をまとめ、それとなくアドバイスをくれるフォローの天才。

だが、いかんせん。あいにく俺の地元は、平成不況に耐えきれずシャッター街と化し、わずかに生き残った地元密着型スーパーは、最近できた大型ショッピングセンターに客を取られ業績悪化が著しい。つまるところ地元じゃ人件費に投資するほどの企業体力が無いのだ。

「田舎にや田舎の義理と人情と裏切りがあつて、近所のオバチャンの値切りが怖いんだよ。あと純粋に地元で働きたくない」

「それが本音だな」

呆れたふうにはタバコを口に運ぶ拓也。

「そついや弘矩、今日は仕事？」

右側の日向に立つ長身な人影に声を出すと、

「あ？いや、今、客から連絡あつて来れないらしいから休むわ。つか、来月まで客取れそうにもないなあ」

こいつは、神栖^{カミス} 弘矩^{ヒロノリ}。

振り返った顔は、不良特有のオーラを纏っているが、人好きのする表情。ついでにモデル顔負けの体型と人心掌握に長けた話術を武器にこの夏、国分町の風俗業界で今一番勢いのあるホストでもある。

弘矩も拓也と同じく俺の一歳年上。

俺たちのブレイン的存在かつ、ムードメーカーその2だ。

その弘矩も夏休みロケットダッシュで売り上げを出そうとしたらしいがお客様の財布事情が芳しくないらしく不発弾頭と化したよう

だ。

「つまり三人とも夏休み序盤の予定がぼっかり空いてしまった、と簡潔に拓也が呟いた。

「どーする？九月入ったらゼミの合宿だ」

「どーするもなにも……、あ！」

「どした？期末レポート出し忘れたか。そうか、残念、ザマア見ろ」
なんか弘矩が酷いこと言っているが、この俺がそんなヘマするかよ。今回のレポートも完璧に仕上がっているさ。文末や細かい部分以外全てコピペだが。

「いや、そんな失敗はありえない。ネット上の論文三つからコピラせてもらったからセンセも見抜けないだろうよ。いや、それよりもさ、三人仲良く暇人決定したわけだよな」

「なんだよ、前置きいいから結論教えろ」

「そうそう、三人が暇人になったら何かフラグが立つわけ？二次元の扉が開くとか？」

……拓也をオタク文化に引き入れたのは、確かに俺だが、ここまです毒化するとは思ってもよらなかった。

いや、わざと道化を演じてる可能性の方がずいぶん高いだろう。根は真面目な奴だ。だからこそ拓也は、いろんな奴から相談を受ける事が多いらしい。

まあ、雁首揃えて興味津々、というふうに戻してくれて助かったスルーされたらどうしようと内心ハラハラだったんだ。

「実はさ、昨日隣に住むばあちゃんから手を貸してほしいって頼まれてさ。その内容つつうのが籠鳥山にある洋館のハウスキーパーなんだよ」

この時点で察しのいい弘矩は、だいたい分かったようにため息を吐いた。

「バイトか？さっきはヤル気ねえ、って言ってなかったか？」

「いや、頭数揃えろって言われて面倒臭いからスルーしようと思っただけ、君ら、ヒマでしょ？」

そう言う二人して『そっぴや予定があつたよなあ』なんてありもしない予定を思い出そうとしている。

「あ、ヤル気無い？」

「当たり前だ。なんで籠鳥山なんて辺境に行かなきゃいけないんだよ」

「ごもつとも。籠鳥山というのは、仙台市の辺境として有名だ。なんせ山に行くためにはちよつとした峡谷を一つ、河を三つほど超えた先にある樹海の真ん中辺りにある山なのだ。

一応携帯の圏内らしいが近場にコンビニが無い、面白そうなイベントも無い、海と違い水着の女の子なんて幻想も無い陸の孤島になんて20代の男連中が好きこのんで足を踏み入れる場所じゃない。

だが、俺には足を踏み入れる理由があつた。

もつとも、頭数が揃わなきゃ狸の皮算用になるのは目に見えていたんだが、タイミングが良かった。

「そうか、残念。日給8000円で期間は10日程なんだがな」

「今すぐやろう！ー！そうしよう！ー」

押し倒す勢いで肩を掴んできた弘矩。まったく、現金な奴。

上手い事言つたなあ、なんて思っていたら拓也も、

「美味しい話だな。乗つかるよ」

と、めでたく俺達は、現金欲しさに目が眩み樹海の中にひっそりとたたずむ不気味な洋館に10日間の執事として働くことが決定した。

「おい、そんなバイトがあるなら早く紹介しろつての、真人！」

上機嫌に肩を弘矩が揉みはじめた。

拓也は、何を持って行こうかと物思いにふけている。

くすぐつたいと弘矩から逃げ始めようとしたら駐車場の端から顔を覗かせた黒猫と目が合った。

俺は、神栖^{カミス} 真人^{マスコト}。

弘矩と同じ名字だが、親戚でもなんでもない、同じ名字と言うことでツルんでいるわけだ。

仲間内じゃ大人しい常識人でツツコミ担当だ。

寝ぼけ面と半開き眼のせいでいつも眠たそうな印象を与えてしまいがちだ。

テレパシーでも受け取ったのか、黒猫は一目散に駐車場を横断し、視界から消え去った。

生暖かい風も吹き始め、楽しいだろう洋館のアルバイトなのだろうが、俺にはどうにも嫌な予感というものを感じずにはいられなかった。

静馬はあちゃんという人

さて、大学から地元に戻り、バイトの仲介人でもある“隣のばあちゃん”こと御原^{ミハシ} 静馬^{シズマ}御老体に感謝の挨拶でも、と思い立ち進路を自宅の隣に変える。

ここらで俺の地元を紹介しておこう。仙台市から電車で約35分の場所にある牧歌的な田園風景が広がる産業皆無、市政もこれと無く現代社会から切り離された田舎町だ。

最近になり仙台圏に家を持てなかったサラリーマンご一家の方々が流入してくるようになり、新市街と呼ばれる住宅地を形成。昔からこの町に住んでた人間から見れば急に人口が増えたように思う。

そんな田舎町のせいか原住民の老体方は、新参者の新市街に住む人達にいい感情を持っていないようだ。

この地方過疎化の時代において人口が増えるだけでもありがたいと思うべきだとは思うんだがな。頭の硬い老体と地元原理主義者は徹底抗戦の構えでなんだか空気が悪い。

ああ、そうだ。あまり口に出す事でもないが俺の先祖は、大層な地主だったらしく新市街の反対側の山の中に屋敷と言っても過言ではない家があり、なぜか知らんが旧市街の顔役、なんてポジションに納まっちゃった。

おかげで俺が次期神栖家当主だと勘違いした新市街の連中から子供の頃にはいろんな嫌がらせを受けたもんだ。だが俺は、大人になつたらこんな狭い土地とはオサラバするんだと言い続けたため旧市街の連中からは裏切者、なんて言われて新市街、旧市街どちらからも援護の無い世界に住んでたわけだ。

そんな生活が続いた小学2年の時、家の隣に東京で暮らしていた、ジジイの友達と言うバア様が孫を連れて帰ってきた。

旧市街の連中は、頭数を増やそうと。新市街の連中は、敵方のウイークポイントを知るであろうニューフェイスを抱えこもうと盛大

なお帰り会が開かれた。

それはそれは、イカれた光景だったとも。だいたい状況がイカれていると人間って奴は、イカれ度合いに拍車がかかる生物らしいな。一人の老婆を囲んでヤジと小競り合いの応酬。まあ、今思えば爆笑ものだ、だが傑作だったのは、ついに殴りあい寸前というところで静馬はあちゃんが『黙らんか、バカ者共！』と大の大人数十名を一声で黙らせてしまったことだ。

その後隅っこの方に引っ込んでいた俺の目の前まで歩つてくると、『まったく、最近の大人がバカだと子供がかわいそうなもんだよ。見な、人を下から見るとひねくれちまった子供がここに居るつてのに大人が一人も気づかないなんてね』なんて今まで会話の中に欠片も出なかった俺を引き合いに出しやがった。

確かに当時の俺は、ひねくれてたし、人間不信と現実のバカらしさを悟つたように他人との繋がりを断つていたが、確実に言えるのは無表情、つまり半目で何事もつまらなさそうな顔だっただけで下から顔を見るような陰鬱な子供じゃなかったのに。

まあ、それは置いて続きを話せば、静馬はあちゃんは俺の視線の高さに合わせるように腰を下ろし、『坊や、年いくつだい？』なんて聞いてきた。

人と話すなんて久しぶりだったが『じゅ、十歳……』と自分でも呆れるかすれ声が喉から出てきた。ばあちゃんは、

『そうかい、じゃ、アタシの孫と同じ年だ。こっちに越してきたばかりで右も左も分からないみたいだから仲良くしてやっておくれ。名前は何てゆうのさ？』

『マサト、神栖 真人』

『真人かい。よし、真人。アタシん家に孫が留守番しとるからいつて話しかけてやっておくれ。こんなバカな年寄り共のと一緒にいるよか大分居やすいと思うよ』

『……行つても、いいの？』

『当たり前さね。孫の名前は茉莉、^{マツリ}よろしくしてやっつくれ』

そんな会話の後、俺は逃げるように宴会会場を抜け出し静馬はあちゃんの家に向かった。

その後の事はよく分らないが、大人連中とガキ共の嫌がらせがピタリと止んだ。たぶん静馬はあちゃんが何か言っただろうとは思うが。

いや、それだけじゃなくてそれからというものは俺は中学を卒業するまで静馬はあちゃんの孫、茉莉と一緒にいたから、とゆうのもあるんじゃないか、とも今になっては考えられる。

回想が長くなっちゃったが、要するに俺は静馬はあちゃんに借りがある。俺を一人の人間として扱ってくれたこと、俺を真人間の道に戻してくれた、かけがえのない友達と巡り合わせてくれたこと。

「と、ようやく着いたか。隣ん家に山回り込んで行くなんてどうかしてんぞ、まったく」

俺の家は、山の中腹にあるのだが、道は一本しかないため麓から迂回してご近所に会いに行かなければならないわけだが、裾広がり型の山であるためちよつとしたピクニック気分を味わう羽目になる。加えて言えば静馬はあちゃんの家は、山の反対側に回り込み更に竹林を抜けた先なのでここまでいくと妖怪の一匹くらいは出そうなものだ。実際出たって噂が絶えないしな、ここらへん。

「相変わらずボロいな、静馬はあちゃん家」

竹林を抜けた先に現代においては稀少物件となった茅葺きの日本家屋が狐火もかくやという弱々しい光を漏らしながら鎮座していた。

そう、この幽霊屋敷が静馬はあちゃんと俺の幼なじみ、茉莉の暮らす家だ。

配役×イレギュラー

「よう、ばあちゃん。また生きてるかいい？」

玄関から入ってすぐ、これまた古風な囲炉裏が中央にしつらえられた時代劇風の居間に見慣れた風体が置物みたいに座ってる。

全て白髪 of 髪の毛を後ろでまとめ、最近酷くなったと言う老眼を覆う上品な眼鏡。部屋着だがノリのきいた割烹着姿の静馬はあちゃんだ。

「生きてるかとはご挨拶だね、マサ坊。アタシが簡単にくたばる人間だと思ったら小百合の腹のなかに逃げ帰って一から出直しな」

「やれやれ、生きてはいるみたいだが口が腐っちまってるな。どうにかならねえ？防腐剤突っ込むか？」

「口の減らない坊主だね。また茉莉の作った晩飯を食いに来たか」

「口が減らねえのはどっちだよ。さすがに俺も80超えたら口が減るだろうに、ばあちゃん全然減らないな」

ま、それがばあちゃんの元気の証拠だ。

今年で81歳とゆう高齢社会の一翼を担うようになって、町内運動会に出場し、副賞のほとんどを掻っ払っていくスーパーなババアでテレビ局の取材なんか来たこともあったな。

「頑丈に産んでくれた母様に感謝だよ。いまだにマサ坊と舌戦ができる」

「ばあちゃんの母ちゃん？江戸時代産まれ？」

「このガキはホントに敬意って言葉を知らんのかね」

呆れた顔で感想をもらしたばあちゃんが後ろにある台所に向けて声をかける。

「茉莉、マサ坊の茶碗が必要だよ。出しておやり」

すると台所から聞きなれた幼なじみの快活な返事が返ってきた。

「自分で出してよ。どこに何あるか分かかってるでしょ」

「だとさ。早く行きな、おかずが無くなっちゃうよ」

「そりゃ困るな。晩飯作ってないだろうしな」

一瞬、ばあちゃんが“そうかい”なんて消えそうな声で呟いた。しかも柄にも無く哀れむように。

らしくもないよ、ばあちゃん。

「よう、茉莉。おかずって何だ？そして裸エプロンだったら俺は嬉しくて泣いちゃうぞ？」

ばあちゃんの顔は見なかったことにして、俺の口は、勝手にフザケタ戯言を輸出済み。

「死ね、バカマサ」

台所で軽快な音程でキャベツを千切りしているのは、御原 ミハシ 茉莉 マツリ。黒髪の長髪をポニーテールにした彫りの深い、日本人とは違う顔立ちが人目を集めていたが、比例するように傲岸不遜な表情。西洋の血が入っている証拠のような肌は白く、瞳は深緑色で芽吹いたばかりの若葉を連想させる。

身長は、俺より背が低いクセに脚の長さで勝利し、カモシカのようになやかな容姿は中学時代から男子垂涎モノだったが、今は当時より丸みを帯び、女らしさが増したように思う。

「アンタ、少しは大人になったら？その年でエロ会話っていまだに思春期真っ盛りか」

「ハッ、俺はムツツリスケベなんだよ。こんな台詞、お前以外に言うか」

と、その言葉を聞いた茉莉は、若干、頬が赤らんだ。

なんだ？この反応？

気を持ち直した茉莉は、まだ頬を赤らめながらも文句をブチブチ言ってる。

「最悪、アンタと幼なじみだってことが私の人生における汚点だわ」

「そう言っなよ。仮にも小六まで一緒に風呂に入った仲だろ？」

「だから！そうゆうトコを治せつつってんの！！」

それで会話は終わりだとばかりに流し台に茉莉が向き直る。

とまあ、自分の意見を堂々と宣言し、グイグイと周りの人間を引

っ張っていくリーダー気質の持ち主なのだが、本人にその自覚がな
いらしく中学時代はよくよく俺がフォローしていたものでコイツこ
の考えてることは、だいたい分かるようになっていた。

俺は俺で自分の食器を取り出しにかかり、炊飯器が炊き上がりを
知らせると使い込まれたヘラを手に純白の飯をかき回す。

「それで、さつき、めーるで書いてあつたけど、マサ坊も水菱屋敷
に行くんだね？」

居間から聞こえたばあちゃんの声の中に聞いたことがあるような
気がする単語が入っているが、それがなんだか思い出せない。

「ああ、俺と友達二人でノルマだった三人はクリアだろ？つて、水
菱屋敷つて何？」

「何つて、マサ坊。アンタ自分が働きに行く場所の名前くらい覚え
ておきな。アタシが使用人していた水菱一族の避暑用の屋敷さね」

「いや、初耳だけど。……いや、待て、水菱？水菱つてあの大財閥
の水菱！？ばあちゃん、そんな一族の使用人してたの？」

大財閥、水菱総合コーポレーション。

その中核に陣取る水菱一族は、日本有数の大富豪で時代をさかの
ぼると江戸時代の頃から歴史に出てくる。俺も退屈な日本史の授業
で習ったから覚えている。そんな名家の関係者が身近にいるつての
はかなりレアだろう。

そんな俺の驚きをよそにはあちゃんは呑気にかからと笑った。

「ハハハ、言つてなかったかい？アタシやこれでも“へつどはんち
んぐ”されたえりーとだよ」

「信じらんねえ、こんなド田舎からどうやって……」

啞然としている俺を横目に茉莉もクスクス笑っている。

「なんだよ？」

「だって、その顔、……プツ、アハハハ」

「……それで、さつきもメールで送った通りなんだけど、こんな急
場にハウスキーパーを雇うなんて、そんなに人材が足りないのか？」

そう、昨日ばあちゃんから話を聞いた時から違和感ありまくり、

どう考えても不自然だ。ただでさえ日本の大富豪。人材だけでなく人員も揃っているだろうに。

「大富豪となるとね、世間のブン屋どもの格好の餌さ。四六時中そんな連中と渡り合って、その息抜きに家族総出の旅行で渡世の喧騒を忘れよう、って時にいつも見ている使用人じゃ味気ないだろ。そこで何年か前まで夏の旅行でこっちに御当主様方が来ている時はアタシが世話してたんだが、今年は腰が痛くて動けそうもないから茉莉とアンタに代役を頼むことになったわけさ」

「だったら俺と茉莉だけでもいいだろ。なんで俺以外に二人、なんてノルマを出したんだよ？」

その疑問に答えたのは、ばあちゃんではなく味噌汁を分けている茉莉だった。

「簡単な理由よ。アタシとアンタだけじゃ手が回りきらないの。明後日向こうに行つて、水菱のご家族が到着するのは、その二日後。それまでにベッドの日干しや敷地内の掃除、空気の入れ換え、その他諸々の雑務を二人でやるには無理があるわ」

そりゃたしかに、結構な重労働だ。さすが日払い8000円は、伊達じゃない。

「ハウスキーパーは、アンタとアンタの友達二人とアタシ、それとおばあちゃんの知り合いのお孫さんの五人。今回限りの急場の人員補充だけと言葉使いには気をつけてね。さ、ご飯出来たから運んでマサ」

「へいへい、てゆーか、ばあちゃんの知り合いの孫？誰それ？」

晩飯を運び再び居間に戻るとばあちゃんがニコニコと笑っている。子供の頃からの経験上、ばあちゃんがこうゆう笑い方をしているときは、大抵口くなことじゃない。

「まあ、面白い子だよ。真っ直ぐで、冗談が通じなくて、少し変わつとる所がじいさんそっくりでねえ」

「マサとは、たぶん初対面じゃないかな。名前は、……………」

告げられた名前の人間。

俺は、その人間と出会うことによって平凡という日常とはかけ離れた、とんでもなくヴァイオレンスな非日常という、世界のもうひとつの側面、狂気と欲望を基準に動く人間達の世界に脚を踏み入れることになる。

そう、全てが計算通り、しかし、実際動かしてみれば矛盾だらけの犯罪者達の領域に。

いざ、水菱屋敷へ

ひた走る車、夏の陽射しに樹林のトンネルはのびのびと生い茂り、こぼれる日光とセミの合唱が、ここは人の触れざる地だと主張している。

もちろん比喩表現だが。

実際のところ、ここいら一帯は私有地で、所有者が最低限のインフラを整えただけで一切開発を打ち切ってしまい、現在も辺り一面に過剰なまでのマイナスイオン発生兼二酸化炭素吸収装置である木々が乱立しているわけだ。言うまでもないがこの土地の所有者とゆうのは、水菱一族。そして、この緑の王国のほぼ中心に水菱屋敷と呼ばれる別荘が王宮の如くそびえ建っている。

「空気ウマー！」

「緑スゲー！」

俺が運転するハリアー・ハイブリッドの後部座席ではしゃぐ拓也と弘矩。二人ともはしゃぎ過ぎだ。だいたい、弘矩、お前の地元にもこれくらいの山はあるだろうに。

「マサ、この二人がアンタの友達？」

助手席に座る茉莉が怪訝そうな顔で聞いてきた。

「ああ、真正銘、俺の友達だ。右側が羽佐間 ハザマ 拓也、タクヤ 左が神栖 カミス 弘矩。二人とも俺達より一歳年上」

「よろしく」

二人して呑気に返事を返している。まあ、初対面なら茉莉のよそよそしさも許してくれるだろう。

それにしてもこの辺り一面の緑。はしゃいでいる二人は何も感じていないようだが、ここまでいくと外界から隔絶された、独立した一つの閉じた世界に思えてくる。

そう、俺達の住む世界とは別の常識によって動く異世界とでも言うように。

「どうしたのよ？ボーツとしちゃって。ちゃんと運転してよね、事故ったらどうすんの？」

「分かってる。ま、そう心配すんなよ。それよりゲストの家族構成をもう一度教えてくれ」

「いいけど、そんなに緊張する事ないよ。皆それなりにいい人だから」

「名前間違えないようにだよ。俺、名前と顔を一致させるの苦手なんだよ。知ってるだろ」

「知ってる。初めて会った次の日に“花子”って呼ばれた時はマジでぶん殴ったしね」

そんな昔の事を言いながら茉莉はクリアファイルからクリップで止めた資料を取り出した。

「えっと、まず御当主様だけど名前は知ってるでしょ。水菱^{ミスヒシ} 宗継^{ムネツグ}様。かなりの頑固者で、おばあちゃんと亡くなった奥様の言うこと

しか聞かない人らしいけど戦後の高度成長期にバブル経済を見通して航空事業、リゾート開発、それに伴う法改正を当時の政府に打診して莫大な富を築き上げた経済界の王様らしいわ」

「しかしながら上海市場暴落を予期する事はできず、大赤字を弾き出し大量の社員をリストラし脅迫文が月イチで届く人気者、でいいんだっけ？」

上海市場暴落。

好景気に沸く中国株式市場の中核である上海で起こった株価暴落は、世界中の大小様々な企業に深刻なダメージを与えた最も記憶に新しいエコノミッククライシス。

だが、そんな中で一度は大赤字を出した水菱グループは、いち早く独力で業績を回復させ、次の決算では黒字転向で他企業に差をつけた、とニュースで騒がれたものだ。

業績改善のための大量リストラという強引な手段というタイトルの記事と共に。

「次は、御当主様のお子様方。長男の水菱^{ミスヒシ} 宗明^{ムネアキ}様。現水菱グループ

プの社長。政界と法曹界にかなり太いパイプを持っているみたい。失礼なことすると訴えられて社会的に殺されるわよ」

「そして奥さんの華織カオリさんは花道の名門一族出身。ただその実家が廃業しちまい同時に旦那が責任者だった海外リゾートホテルが営業不振でとり潰し、と。たしか、子供の名前が……」

「美乃里様。御当主の子供達を除けば一番当主と成りうる人だけど、噂じゃ美乃里様の旦那様が当主になるみたい」

この男女平等の時代に時代錯誤もはなはだしい。

「次は長女夫婦。夫の秋雪アキユキは入り婿で、元は水菱宗継のボディガード。今は警備部部长。長女の彩登美サトミは、表向き専業主婦だが、当主直属の情報収集部門で他企業の秘密を暴いてマスコミにリークしたり企業秘密を手に入れ強請もやってる疑いあり、と」

「あくまで噂程度のこと。証拠も無いのにそんなこと言わない。ご息女の彩葉様イロハは海外留学中の大学生でアタシ達と同じ年。覚えた？ たしかに娘の彩葉は、俺達と同じ年らしいが海外留学、かつイギリスの超名門大学に通う才女という時点で距離感を感じるのは俺だけだろうか。

「次女夫婦が金融部門と建設事業部門を総括している。でいいんだっけか？」

「うん。金融部門部長、万彩様マンサ。株式市場の魔女、って呼ばれてるほどのやり手。建設事業部門部長、理一郎様リイチロウ。高卒からの現場叩き上げでご家族の中ではノンキヤリアだけど御当主に認められるほど仕事が早くて労働者側からの信頼が高いからパイプ役として重宝されてるわね。ご息女の彩那様は今年で小学4年生。一族の中では一番年少ね」

「で、唯一の養子、水菱ミズヒシ 雄司ユウジ。医薬品関係の新薬開発部門主任研究員か。噂じゃアメリカ陸軍の兵器開発に関わっていたとか」

「ゴシップの読みすぎ。本人は虫も殺せない程の善人だから」

これで水菱一族の家族構成はだいたい覚えられたと思う。

「それと一家族ごとに専属の使用人を連れてくるみたいだからアタ

シ達の仕事は、布団干しや風呂を沸かすこと。まあ、御一族と直接関わることは少ないはずだから気楽にいきましょ。後ろの二人も分かりました？」

「ウイース」

「オツケー、とりあえず言われたことしておけば問題無い、ってことでしょ」

各々の返事の後、突然道が開け、西洋中世の城門かと思うほど巨大なレンガと櫓の木製の門が見えた。

あれが水菱屋敷の正門。古めかしい外観とは違い、電子ロックと駐在ガードマンの二重構えの堅牢な守備体制により今まで幾多の窃盗犯をブタ箱に輸出したらしい。

よくこんなアホらしいまでの金を掛けた別荘に侵入しようと思っ
たな。

「で、別口のハウスキーパー、碓氷某つてのは先に来てるんだっけ」
警備員に今朝ばあちゃんからもらった電子パスを見せ、ロックを
解除しゆつくりと車を前進させる。

「某^{ナニガシ}じゃなくて朔馬君。碓氷^{ウスイ} 朔馬君^{サクマ}。覚えなよ」

「あ、俺、羽佐間だから名前似ててややこしいかもだね」
後部座席からテンションの高い拓也の声。

「じゃあ、拓也さんって呼ぶことにしていいですか？」

「もちろん。タメ語でいいし」

「あ、俺もタメ語でいいよ」

「はい、分かりました。それじゃこれからは拓也さんと弘矩さん
って呼ばせてもらうね」

ニコツと笑う茉莉と会話を始めた野郎二人の声を聞きながらハリ
アー・ハイブリッドは高層ビルの地下駐車場みたいにだだっ広いガ
レージに停車した。

恋愛感情とメイド服

「……一つ思っただけどさ、ここって今通って来た道以外に道路って無いんだよね」

荷台から荷物を下ろし、各々の部屋に運んでる最中に拓也がそんな事をポツリと言った。

たしかに、ナビで検索かけたら一本道しか表示されなかった。

「ああ、ここ半年の間に新しく作られていなければ道は一本道だけだな」

「おお！じゃあここが台風直撃コースで道路が土砂崩れとかで塞がったらここは隔離された場所になるんだな！」

「で、次々と発見される他殺体と謎めいた暗号、とか？」

「そうそう。あ、でも探偵役が居ないよな。最終的に全員殺されて事件は迷宮入りという結末に？うわ、切ないなあ！」

アホか、どこぞの頭が大人で体が子供のナンチャッテ小学生かジジイの栄光を毎度毎度口にする探偵気取りのマンガじゃあるまいし、そんな出掛けた先で簡単に殺人事件なんて起こってたまるか。

「だとしたら犯人になれば？最後まで生き残れるぞ」

「やだ。警察の世話にはなりたくないなあ」

ごもつとも。推理小説やマンガに登場する犯人は、大概、報われない最後を迎えるというのがパターンだ。自ら進んでそんな配役になりたいと思う奴は居ないだろう。

「で？茉莉ちゃん、だっけ？どうゆう関係？」

一回は聞かれると思っていた。大学生といっても所詮は高校生の延長線上でジョブチェンジしただけにすぎず色恋沙汰の話で盛り上がるのはしょっちゅうだ。いや、高校生より生々しく表現してくるときがあるからトキメキ皆無で現実の男女関係の複雑さを感じるわけだ。

だが、俺も今年で21歳。高校時代の悪友から結婚報告メールを

受け取ったりすると、

（俺も子供作らなきゃいけないのかなー）

なんて思いがよぎり種の保存本能に真っ向から反逆する面倒臭さが全身を包んだものだ。

かと言つて神栖家の人間で最年少なのは俺で、俺が子供を作らなければ代が途切れる。それもありかなあ、なんて思っていたら親戚筋の世話焼きなオバチャンが見合いの段取りを付けているという話が舞い込んだ。

この自由恋愛時代に、しかもこの歳で見合いするほど俺は出会いに絶望しているわけではないので丁重にお断りしよう、そうしよう。ハハハ現実逃避って楽しいなあ。

「おいおい、どうした、急に無口になって。もしかして言えない関係？」

しかし、空想は、現実のちよつとした雑音で簡単に壊れるものだ。「別に、たいしたものじゃない。子供の頃、朝から晩まで一緒になつて走り回つて、一緒に食った飯の回数は、たぶん親父や母さんより多い幼なじみ、ってとこだよ。悪いね、期待にそえなくて」

「それ、昔の話だろ。聞いているのは今のことだよ」

「……………」

それを言われると曖昧だ。昔のような感じで接しているがお互いそれなりに成長して、別の高校に進学してぱったり会うこともなくなったが、卒業式の帰りにぱったり出くわし久しぶり会った茉莉は何だか大人っぽくなつていて少しばかり、……ああ、絶対本人には言いはしないが、見惚れちゃった。

その後は普通りの付き合いで、そもそも、見とれただけで、好きとか付き合いたいとか勘違いするのは思考の飛躍だろう。実際のところ、拓也の質問への解答は、

「……………よくわからねえ」

「思春期の中学生かよ」

けっこう最近に同じようなこと言われたことあるよな、俺。

「まあ、本人が分からないって言うならいいんだけどな。けど……」
「けど、なに？」

「女の子っていついなくなるか分からないから、もし真人が茉莉ちゃんのことが好きなら後悔しないようにしたほうがいいんじゃない？」
「だから、そりや分からないって！」

「ハハハ、だから保留でいいだろ。悪いな、変なこと聞いて。さて、さっさと運ぼう」

そう言っ角を曲がると弘矩が走って来た。

「おい、これ見る！制服だ！」

と、オペラ歌手みたいに両手を広げ自分の纏う“制服”とやらを見せてきた。

黒のベスト、同色のスラックス。白いワイシャツに深紅の蝶ネクタイ。ベストとスラックスには、銀系でアクセントとしてか波模様が刺繍されている。

「どうしたんだ、それ」

「さっき茉莉ちゃんが来て“これに着替えてね”って渡してきたんだよ。たぶん部屋に置いてあるんじゃないかね？」

と言うもんだから角の手前側に割り当てられた俺の部屋を開けてみると質素なベッドの上に折り畳まれたベスト、スラックス、ワイシャツと蝶ネクタイ、あと見たことのない虫メガネみたいなアクセサリーが置いてあった。

「いやあ、サイズが合うかなあ？」

「いろんなサイズがあるみたいだぞ。つか、茉莉ちゃんも制服似合ってたな。なんつうの？献身的、みたいな？」

「なんだそりや？茉莉が献身的？傲岸不遜が下着つけて出歩いてるような奴だぞ？」

「マジで？茉莉ちゃんって以外と大胆だな。いや、それは後で詳しく聞くとして、たしかメイド服着てたぞ」

「「何い！！」」

俺と拓也は、二人して同時に叫んでいた。

「め、め、メイド服！？馬鹿な、ありえねえ！あいつが誰かに従順するような態度なんて見たことねえ！」

「いや、それよりメイド服？エロゲーの中でしか見たことないのに、ついにリアルで拝める日が来るなんて！」

急いで荷物を置き、茉莉（メイド服ver）を探すため、屋敷内を走り始めた俺達三人は、ついに、中庭でシーツを干している茉莉の後ろ姿を発見した。

「おおい！茉莉い！？」

振り返った茉莉の格好に俺は、軽く目眩を起こした。

漆黒のスカートと純白のエプロンが夏の風にそよぎ、黒いストッキングが柔らかに包んでいる足は、本人は確実に否定するであろうが色っぽさを演出し、メイドの代名詞とも言える白いレース付きのカチューシャ、ホワイトブリムと言っらしいアイテムを頭上に装備した姿は、ヴィクトリア朝時代の英国中間層だった人々の姿そのものと言える。

だが、細部が現代的にアレンジされており、まるつきり古めかしい印象を与えず、かと言って風俗店のコスプレみたいな安っぽさは皆無。表現すべき言葉は、伝統の意匠の中に織り込まれた最先端か、最新デザインの中に甦った伝統、と言ったところだ。

「何よ、マサも拓也さんも固まっちゃって」

いぶかしむ茉莉は、生来の堂々とした態度であるが、逆に、そう、逆に、だ。そうゆう態度こそが茉莉（メイド服ver）にピッタリとマッチしている。

「えっと、茉莉？だよな？そっくりさんで本物は今頃ベッドを天日干ししてマットをサンドバッグ代わりにして拳骨叩きつけてる、ってオチは無いよな？」

「アンタは、アタシを何だと思ってるのよ！」

振り上げた拳の軌道が全く見え、いつの間にか俺の視界は、真夏の青空に強制転換して、下顎で何か爆発したんじゃないかってくらい神経が痛みを脳ミソに訴えている。

「イデデデデ、コノヤロ。いきなりグーパンかよ！せめて平手打ちくらいにしょきゃ女つばいのによ！」

「アンタが腹立つこと言うからでしょ！それに正確にはグーパンじやなくてアッパーよ！わかったか！このバカマサ！」

「カアアア！可っ愛くねえ！服が変わってもやっぱり茉莉は茉莉だな！」

「ハア？意味わかんない！何でアンタなんか可愛いつて思われなくちゃいけないのよ！」

「バツカ、わかんねえか？服装によつて茉莉の普段のガサツさが少しは和らぐんじゃないかって俺の淡い希望！」

「アタシは何着てもアタシのままだったの！ってゆうか、そんなくだらない事考える暇あるなら手伝いなさいよ！穀潰し！！！」

「なに？聞き捨てならねえな。誰が穀潰しだった？」

「自分の事って気付きにくいものね。アンタのことに決まってるでしょ！いつもいつも家に晩御飯タカリに来て！アタシん家はアンタの餌場じゃないんだからね！」

俺と茉莉は、最初に何で言い争いが始まったかなんて忘れ、目まぐるしく話題が代わる。だが、晩御飯の献立のバランスの悪さ、雨漏りが味噌汁の中に入った時のやり取りなど、痴話喧嘩としか言い様のない不毛な言い争いを続けていると、洗濯したシーツの影にいた男性用制服を着用した人が間に入ってきた。

「あの、喧嘩はそこまでしておきませんか？まだやることは残ってるんですし」

もう一人のハウスキーパー

「確かにそうだな、オイ、二人とも、そこらへんで一時休戦だ。ホラホラ、いつまで睨みあつてんだ」

初対面の人間に至極真つ当な意見を出され、弘矩がやめやめ、と諫めに入つたところで俺と茉莉はお互い視線を切った。

「ダメだよ茉莉。君は女の子なんだからそんな簡単に手を上げちゃ茉莉にそんな事を言つてる執事君に助言しておこう、思考より行動、行動に勝る思考無しが茉莉の生き様だと。もちろん、心の中の助言だ。」

「ほら、真人も落ち着け。見慣れない幼なじみに驚いただけだろ？」ム、まあ、驚いたには驚いたけど……。

「へえ、弘矩さんの言葉だとすぐ大人しくなるんだ？」

茶化すように喧嘩売つてきやがるな、茉莉の奴。ハラタツなあ。「別に。茉莉相手に無駄な会話して無駄に体力減らすのがもつたいなくなつただけだよ」

「なんですつて？そつちが先に……！」

「ハイハイ、真人から喧嘩売つたんだから謝つとけ」

「なっ、俺！？」

「当たり前だろ、ホラホラ早く。これからさき空気悪いの嫌だぞ、俺」

「うつ……」

こうゆう時の弘矩つて逆らえないんだよなあ。

「ほら、茉莉も謝る。先に殴り付けたの茉莉なんだから」
「……わかつたわよ」

なんてやり取りの後、俺と茉莉はお互い“ごめんなさい”と頭を下げ、弘矩や拓也と謎の執事君にも悪かったと謝った。

「それで、こつちの人が碓氷^{ウスイ} 朔馬君^{サクマ}？」

とりあえず配給された制服に着替え、中庭に戻ってきたところで

気になっていたことを聞いてみた。

「あ、はい。碓氷 朔馬と言います。20歳です。短い間ですがよろしく願います」

ペコリと頭を下げた碓氷 朔馬君は、男にしちゃ華奢で背丈も俺より低く、声もいくぶん高い感じ。顔は端正な造形で、お兄系の弘矩や童顔の拓也とも違う雰囲気で、そう、シヨタ系とも言うのか、小動物じみた可愛さ溢れるキャラクター。20歳でまだ可愛さが残るのであれば子供の頃は、さぞ年上キラだったのではなからうか？

「あの、何か？」

「いや、なんでもない」

「マサは人の顔を覚えるの苦手だから初対面の人をガン見しちゃうの。気にする事ないわ」

さっきの騒ぎの影響が若干冷たい対応に思える。

「それは記憶障害が何かなんですか？」

「いや、単に人の顔が覚えにくいだけだから。そんな深刻な話じゃないから大丈夫だよ」

いやはや、ばあちゃんの言うように真面目だなあ。

こうして俺と碓氷 朔馬は出会い、この水菱屋敷における事件が因果な関係の始まりとなることを、その時は予想だになかった。

「ところでさ、俺達着替えてきたけど何すればいいの？」

そんな拓也の素朴な疑問から俺達は本館の大掃除、別館の大掃除、書庫に納められた本の虫干しなど主に肉体労働全般を任せられ、華奢な朔馬君と茉莉は食器類を洗い、ベッドメイクや遊技場の準備で夕飯までゆっくりする時間は皆無だった。

使用人に割り当てられた食堂に各々の仕事に一段落つけて集まったのは、

夜8時を回った頃だった。

「あゝ、腹ぺコだあ」

「たつつあんは本を干してただけだろ」

「いやいや、本を出したり戻したりで結構重労働だよ、あれで。それでもまだ全部本を干せたわけじゃないから明日も大変だな」

「ああ、こつちも別館だつてのにまだ掃除しきれてない部屋あるんだよな。真人、本館どのくらい終わった？」

背骨を回転させて凝りをほぐしている弘矩はキッチンから出てきたばかりの俺に話をふってきた。

「こつちはだいぶ終わったよ。茉莉と朔馬君にちょこちょこ手伝わってもらってたし」

「はあ？こつちは一人で別館片づけてたんだぞ？ズルくねえか、それ」

そんな事を言われても、茉莉や朔馬君に掃除している現場を見られると“手伝うから”と強引に掃除機持つて行かれるわけで。

「まあ、俺の滲み出る主人公成分のおかげ？」

「気色悪いこと言わないでよ。単に危なっかしいから見てらんないのよ。掃除機で高そうな壺割りそうだったし、棚の中にある食器類を取り出さずに動かそうとするし」

だって面倒じゃないか。

「そうですよ。二階のガラス窓拭くの面倒だからって外に乗り出してパントマイムなんて言つて。危ないです」

と二人に抗議されては反論のしようも無いわけで。

「あゝ、……大丈夫だよ。俺、運動神経と反射神経良いし」

「アタシは金銭的な心配してんの！」

「落下し後動ける人が足らなくなると僕達が大変なんです」

あれ？俺の体を心配してくれたんじゃないの？

言い様の無い虚しさが木枯らしを心に吹かせ、ちよつと悲しくなった。

「なあ、たつつあん。真人つて茉莉ちゃんと話す時と俺らと話す時

の性格変わってるよな」

「そうだね。それだけ付き合いが長いってことなんじゃない？」

うつ、そうゆうことは知っても話さないでほしい。

そうゆう話題に食いつく奴がいる時は特に。

「あ、それ気になるな。マサって普段の学校でどんな奴なんです？」

ほらな。なんだか嫌な予感が止まらない展開だ。

「どんな奴、って、普段は大人しい無口キャラ装おってるけど根がスケベだからたまに鼻の下延びきってる時あるよな。最初あれ見た時にムツツリスケベってことがわかったし」

「おい！？」

「ああ、確かに。一年のサークルの時に伊織ちゃんの尻ガン見してたな」

「おい、そこらへんに……」

いかん、今まで秘密にしていた大学生活の恥部がさらけだされてしまう！茉莉なら諦めているからいいが、ここには朔馬君も居るわけで俺のキャラというのが固定される！

「へえ、伊織さん^{イオリ}っていう人のお尻見てたんだあ」

「なんだか、真人さんって……」

茉莉は、口で笑みを作りつつ目で『いっぺん天国逝ってみる？』と語ってるのがわかる。

朔馬君は、残念そうなものを見る視線を投げ掛けて来て、俺、逃げ場無し。

ああ、これで俺のキャラは、無口なムツツリキャラに定着しちまったことだろう。

クソ、拓也と弘矩め、後でおぼえてろ。

それから野郎二人にイジられ、幼なじみと初対面君からの冷たい視線が刺さり、それでも笑いが絶えずほのぼの過ごし、あつという間に2日が経過していき、水菱一族が避暑にやって来る日にちに力

レンダーが移動した。

水菱の家系

セミの大合唱が四方八方から聞こえてくる特殊音楽ホールとも言える水菱屋敷の正門に数台の国内最高級セダンが停車している。

外装はノーマルだが、内装は全シート革貼りでドアはかなり分厚いようで、開ける時にちよつとばかり力がある。詳しくは知らないが、おそらく窓も防弾使用の強化ガラスだったりするのだろう。

ここに止まつてる車だけで億単位の額になるんじゃないだろうか。俺達のせせこましい金勘定を聞いたら鼻で笑いそうな別人類とは思えない。

「ようこそいらつしやいました。御当主様、若様方」

どこでそんな礼儀を拾ったのか、茉莉は完璧なハウスメイドの作法でうやうやしく車から出てきたいかにも貫禄のあるじい様に一礼した。

「うむ、短い間だが世話になる。今年は新顔が随分がいるな」

茉莉の少しは後ろに並ぶ俺達を一瞥し、蔑むような視線を向ける老人が水菱の現当主、水菱^{ミスヒシ}宗継^{ムネツグ}だろう。

どうやら人に会つたらまず疑う人らしい。まあ、経営者としてはその方が正解なのだろうが、評価される側からの印象はよろしくない。

「ふん、どこの馬の骨かわからんがな」

それだけ言うたとさつさと本館に入り、すぐ見えなくなった。

「申し訳ないわね、どうやら今朝からご機嫌が悪いようで」

すると反対側の後部座席から白髪のお婦人が出てきた。

「いえ、お氣にならずに。山内さん」

山内さんはニコリと笑い、大きな荷物を両手に持つて御当主様の後を追ひ、中に入つていった。

「茉莉、今の人、誰？」

「御当主様専属の使用人、山内^{ヤマウチ}寿美子^{スミコ}さん。使用人の中では最高

齡でおばあちゃんの元同僚」

小声で返してくれた茉莉に感謝。一族の名前は覚えていたが、専属使用人達の名前までは覚えきれなかった。

「あら、今年は若い子が多いわね。ウッフ」

「う、うあああ!？」

急に後ろから息を吹き掛けられビックリして跳び跳ねた俺の右後ろには派手で露出度の高い服を着ているクラブのママみたいな人が立っている。

垂れ目と厚目の唇は、何が可笑しいのかほころんでいる。

「あ、その、えっと、よ、ようこそ。万彩様!」

「ウッフッフ。はい、ヨロシク。君、新人さんよね?いろいろな教えてあげようか?」

よかった、名前間違わずにすんだみたいだ。すると次女万彩の後ろから子供が声を掛けてきた。

「お母さん、浮気しちゃダメなんだからね」

腰に手を当て、万彩をたしなめる少女。彼女が次女夫婦の娘、万彩那だろうか?

「あらやだ、彩那ったらどこでそんな言葉覚えたのよ。おませさんなんだから。さ、挨拶なさい?」

万彩は何事でもないふうになを招きし、俺の前に連れてきた。

クリツとした目が印象的で、サイドアップにまとめられた髪は柔らかさそうで夏の日差しに照らされ茶色になっている、小学中学年くらいの女の子は、記憶した彩那と一致する。

「水菱 彩那^{ミスヒシ アヤナ}。10歳。帝国学院初等科4年生。……はじめまして」

人見知りなのだろうか、先ほど母親をたしなめた時の勢いが消え、ポソポソと消え入りそうな声で自己紹介し、視線は、じつと足元に固定されている。

子供に自己紹介するときは同じ目の高さで挨拶すると好印象をあたえるとどっかの情報誌で読んだことがあったので、とりあえず腰を下ろし、普段彼女が見ているであろう高さで挨拶する。

「あ、俺、いや、私は神栖 真人と申します。短い間ですが、こちらこそよろしくお願いいたします」

だが、少女はそれだけ聞くと一目散に走り、一人の男性の後ろに隠れてしまった。

「あら、あなた、荷物は太刀音タチネに任せればいいのに」

「なに、少しは体を動かさんとな。ところで、彩那、急にどうしたんだ？」

“あなた”と万彩に呼ばれた男性は、間違いなく婿養子の理一郎だろう。

「こつちのお兄さんと自己紹介してたら恥ずかしくなっちゃったのかしらね。あ、この人は夫の理一郎さん」

「はじめまして、神栖 真人と申します」

さすがに三人目ともなれば口の滑りも良くなって囁むこともなくなってきた。

「水菱 理一郎ミズヒシ リイチロウだ。よろしく頼むよ。おおい、太刀音、君も挨拶しなさい。これから一緒に働く子だそうだぞ」

すると影みたいに気配も無く俺の背後から肩を叩かれた。

「五所川原 太刀音ゴショガワラ タチネです。はじめまして」

長身で見下すように冷たい目をした執事姿の男が俺を値踏みするようにじろじろと遠慮無く見回されているが、お世辞にも気分がいものじゃない。

「あの、私の顔に何か？」

はつきり止めると言うのは簡単だが、この手の人間は何をしでかすか分からないので遠回しに失礼だと言ってやる。

しかし、一人称“私”って、背中が痒くなるな。

「失敬、貴方という人間は、どのような人なのかと考えておりました。お気に障ったのならばご容赦を」

「はあ、いや、別に怒っているわけじゃないけど……」

意外と低姿勢な態度に思わず毒気が抜ける。

「太刀音は、私たち夫婦の専属使用人。でも彩那の使用人がまだ決

まっつてなくてね？真人君、うちで働かない？」

魅惑的な申し出だが使用人なんて気の滅入る仕事は期間限定のパ
ートタイムで十分だ。

「えーっと、考えておきます」

「良い返事を期待してるわ。じゃ、荷物置きにいきましょ」

次女家族が入った所を見届け、次の挨拶、と思っていたら、
「それは、どうゆう意味だ雄司！」

「どうもこうもねえよ。あんたがジシイの財産独り占めしようとし
てんじゃねえか、って言ってたんだ」

「貴様！何を根拠に！」

二人の男がにらみ合い、白いものが目立つ大柄な壮年の男がヒョ
ロリとしたメガネの男に喰いかかり、それを遠巻きに見つめる三人
の女性の瞳は、どれも心配そうだ。

「どうしたんだよ？」

「うん、…なんだか遺産相続についてもめてるみたい」

このタイミングで喧嘩されても困るんだがな。しかも明らかに込
み入った事情が原因だとしたら俺達のような部外者が手を出すとよ
けいにヒートアップするものだし。

どうしたもんだろうな？

近づく不穏な空気

「貴様、言って良い事と悪い事があるぞ」

白髪のおっさんは、土気色の顔色で青筋立ててひよる眼鏡の胸元を掴み上げ、唸るように呟いた。

「そんなに怒るってことは本当だということだろう。理論的に言うて」

「理論的？理論的だと？貴様の言いがかりを否定しているだけだ！」

土気色のおっさんのボルテージが上昇。反比例するように眼鏡のアンちゃんのテンションはゼロ地点から不動の冷静そのもので声に抑揚が無く、まるでアニメの人形やロボットみたいな棒読み。

「得てして本音を突かれれば声を荒げるものだ。人間という生き物は」

確かに、不意に核心を突かれた人間の一般的な反応は、動揺し、つい声に出してしまう。このメガネ、精神分析でもやってるのか？それに釣られる白髪のおっさんは、随分乗せられやすい人のようだ。

「貴様の戯言に付き合う気は無い！下らん事をいう前にさつさと荷物を部屋に置いて来い！おい、一二三！^{ヒラミ}さつさと荷物を運べ！」

「かしこまりました」

忠実な忠犬とでも言う前に今まで白髪のおっさんの後ろに控えていた厳ついオールバックの中年男性が進み出てトランクからバッグを次々と積み上げて行く。一応、手伝った方が良いのかな？

「ん？君は？」

手持ちぶさたにフラフラしている俺を視界に取られたメガネのアンちゃんが、珍しいものを見たような感じで俺に話しかけてきた。

「期間雇用の神栖 真人と申します。水菱^{ミズヒシ} 雄司様^{ユウジ}ですね。荷物をお運びいたします」

他の子供夫婦達と違い、専属の使用人が居そうにない雄司は、一人で手持ちのバッグだけという軽装だった。

「いや、荷物は少ないから結構だ。この通り。ところで、こんな屋敷で働くとは物好きだな。君は」

なんだ？なんか気になる言い回しだな。

「え？それは、どうゆう……」

「そうか、知らなければ気にすることじゃない。昔の話だしな」

それだけ言い残し入り口とは違う方向に足を向ける雄司。どこへ行く。

「あ、雄司様！」

「あんな奴は放っておくのだ、執事！」

鼻息荒く命令を出すのは間違はなく水菱家の長男、水菱 ミスヒシ ムネアキ 宗明だ

ろう。どうにも上から目線で仲良くなれそうじゃないな。こちららは、感情を地面に叩きつけるように靴音高く鳴らし入り口へ向かった。

「気にしないで、父様は感情的な人なの。いちいち気にしていられあがるわよ？」

「あ、っと。美乃里様、ですね。私は」

「神栖 真人。静馬さんの知り合いで茉莉ちゃんの幼なじみ、よね？」

こいつは驚きだ。一応プロフィールを向こうに送っていたとはいえ期間雇用である俺の事を知っているとは。

「別に驚くことじゃないわ。静馬さんの身内と認めた人なんですから。何かあったときはよろしくね」

と言われても確かこの人にも専属の使用人が着いていたはずだが？「お嬢様、お荷物はこれで全部ですか？」

間延びしたの話し方で巨大な荷物を引きずるメイドが近づいてきた。

「ええ、母様の荷物は一二三が運ぶから貴女は、私の部屋に行きなさい」

黒ぶちメガネと後ろにぶら下げたみつあみ。古式ゆかしいメイドルックと相まってメイドの化身とも呼べる女性が俺を横切ろうとし

た時、俺に気づいたようで、はた、と足を止めた。

「あ、私、相羽^{アイバ} 湊^{ミナト}と申します。美乃里様の専属使用人を勤めさせていたいております」

「神栖 真人と言います。よろしくです」

この家の使用人の中では一番感じの良い人だな、この人。

「湊は私の幼なじみてね。そそっかしいとこのあるドジッ子だから気をつけてね」

「もう、美乃里様！人を勝手にドジッ子呼ばわりしないでください」

「あら？何もない場所でコケることはドジッ子と呼ばないのかしら？」

主人と使用人、何気ないやり取りだろうが友達同士の他愛もない会話に聞こえてくる。それほど仲が良さそうに見えた。

「あ、彩登美^{サトミ}おばさま達は夜に来るそうだから真人君達も中に入りましょ」

家族の数に対して止まっている車の数が少ないと思えば、そうゆうことか。

ならさっさと中に入って待機しておこう。

「おい、茉莉。中はいろいろぜ、弘矩達がたぶん待ってるだろうしよ」

遠くの空を見上げている茉莉を呼ぶが、返事が無い。

「おい、茉莉。聞こえてるか？」

「うん、……にわか雨になりそうだね。洗濯物いれなくちゃ」

確かに。茉莉の視線の先に見える空は、天高くまで成長した積乱雲、つまり入道雲がこちらに向かってきている。あれがここまで来るには、まだ距離があるが、せつかく干した洗濯物が濡れてしまつては俺達の落ち度だ。叱られる要因は、なるべく潰しておくにかぎる。

俺と茉莉は、洗濯物が干されている場所に向かい歩きはじめた。

「長女の彩登美さん夫婦は後から来るらしいから、一応タオルを用意しておこう」

「……そうね」

「なんだ？考え事か？」

周りには誰も居ない。何か言いたい事があるなら話しやすい環境と言えるだろう。何を考えているのか分からないが、ここなら話してくれるんじゃないか、とも淡い期待する。

「うん。あの、さ。静馬、アンタまだ剣道強い？」

「あ？なに？どうゆう意味だ？」

「実は、ね。ここって曰く付きの屋敷なの。おばあちゃんがまだここで働いていた頃の話なんだけど、ここで失踪事件が起きたことがあるのよ」

失踪って。つまりは行方不明ってことか？

「それがどうかしたのか？曰く付きって言っても昔の話だろ。俺の腕に頼るような事態にはならないだろ」

かつて人が忽然と姿を消した屋敷。そこで働く事になったとしても、不気味さはあっても恐怖は無い。

茉莉も、何かを怖がっているわけでもなさそうなのに何故そんな事を聞いてくるのか謎が残る。

「なにかとキナ臭いのよ、あの水菱一族って。拓也さんと弘矩さん達の手前、良い人だって言ってたけど」

「つまり、何かあるかもしれない、と？」

そして喜劇は幕を開ける

「わかんないよ。ってゆうより何もない可能性の方が高いと思う。何もない方が良いんだけどね」

確かに、何も無く日々平々凡々に生きるのが一番だ。物騒な騒ぎなんて縁が無い方がいいに決まってる。

「だが、何かありそうだ、そう思ったから俺を道連れに選んだろ」「護衛って言うてよ。アタシは弱い女の子なんだから」

「それなら、弘矩と拓也にも話を通しといた方が良さそうだな。ってゆうか、なんで静馬ばあちゃんは俺入れて頭数三人、なんて言っただよ？」

何か事件が起こったとして巻き込まれるなら好奇心丸出しの茉莉と用心棒代わりの俺だけで十分なはずなのに。

「さあ？たぶん何も起こらないだろうから皆で楽しんで来いってことじゃない？」

随分アバウトだな。だいたい、自分の孫娘に危害が及ぶかもしれないってのによ。

……いや、考え過ぎだろうな。警察が絡むような事件だなんてそう簡単に出くわすものじゃないし。

「とりあえず、洗濯物しまっちまおう。昔の失踪事件だのは夜にでも皆に話そうや」

「オッケー」

遠雷が鳴っている。嵐でもくるのだろうか。

夜6時半。

早めの晩飯を専属使用人の人達が作り、俺達は水や酒を運んだり食器を洗ったりしていた。

屋敷にシェフは常駐しておらず、使用人の寿美子さんと太刀音さんが手際良く魚や野菜を捌いて、ほとんどプロ並みの腕前で味噌汁

や焼き魚を作り上げている。

「水菱家の食卓は意外と庶民派みたい、ですか？」
とは太刀音さんの言葉だ。

口に出した覚えが無いのに凶星を突かれた。

「え、いや、そんなことは……」

「いえ、私も初めて台所を任された時には戸惑いました。それでも私、以前はとある料亭で働いていたもので。それなりの腕前があるものだと思われていたのですが、漬物に味噌汁、焼き魚や煮付け、これほど奥深いものだとは思いませんでした」

話し相手が欲しいのか？　そういや寿美子さんはさつきから茉莉と朔馬に魚の料理方法や台所の豆知識を話して盛り上がっているし。

「まあ、そうですね。てつきり懷石料理やふぐさしとか、高級料亭のフルコースが出てくるものかとおもってましたが」

「御当主様のオーダーでね。あんなものいつも食べて食べあきたからもつと食べやすいものを作れ、とね」

呆れたじい様だな。それで昔ながらの日本食、ってわけかよ。ちよつとはタダで高級料理食い放題、とか胸踊らせてた生まれも育ちも庶民の俺の気持ちを察してくれ。

「少し残念、ですか？」

「あゝ、そうですね。本音言っちゃうと」

「では、その残念以上に美味いと思われる夕飯にしてみせましょう」
そう言った太刀音さんの顔は、自信に満ちた微笑みだった。

ファーストコンタクトで睨み付けられた人であるが、結構良い人なのかもしれない。

そのまま他愛もない会話がポツポツと続いた頃、風雨の音と共に乱暴にドアが開く物音が響いた。

「ん？　誰だ？」

ドアから足早に中に入ってくる音。バラバラの音階。少なくとも二人以上が入ってきたようで、

「彩葉！　彩葉は来てる！？」

「どうしたというのだ、彩登美。雨も拭かずに」

「彩葉と連絡がとれないの！」

「落ち着け彩登美。まずは皆さんに状況を教える方が先決だろ」

「なんだか食堂が騒がしいが、何事だ？」

「もういいわ！彩葉はきていないのね！」

「待て彩登美！外は土砂崩れが起きそうだ！ここにいろ！」

「なんだなんだと食堂の外にいた俺達がゾロゾロと入っていくとびしょ濡れの男女一組が食堂入り口に立っている。」

おそらく長女夫婦の彩登美と秋雪夫妻だろう。しかし表情はどちらも焦りまくって少々混乱しているようだ。

「実は、彩葉様のGPSはこちらの山道に入ったところで反応がなくなりました。一緒に行動してた葉路君とも連絡が取れません。何らかの故障によるものでこちらに到着している可能性もあったのですが……」

「詩織さん、大丈夫ですか」

「はい、大丈夫です、太刀音さん。今は彩葉様を……」

遅れて現れた、こちらにもびしょ濡れのメイドが状況の説明を始めた。

その間彩登美は、しきりに爪を噛み、秋雪はメイド、高槻 詩織の説明を補助している。

話の流れを大筋で説明するなら、ティータイムにくつろいでいる皆を屋敷のあちこちから盗撮し、今夜の夕飯に皆の緩みきった顔をスライドショーにして笑い合うつもりらしかった彩葉お嬢様は、専属使用人である甘木 葉路と共に両親と別行動をとっていたが屋敷に到着したと言う知らせが無く、ぱったりと音信不通となってしまう、両親は心配になり大急ぎでこちらに向かって来たらしい。

ちよつとしたサプライズが思いもよらぬ自爆と相成った、としか言い様がない。

汝、悪巧みすることなかれ。と聖書辺りには書いてあるのだろうか？

「皆様を驚かせようと3時頃に到着しているはずだったのですが」
「なら何故電話をよこさなかった雨が降る前だったら動ける者全員で探したものを」

確かに、土地勘が無いにせよ俺達だったら少々険しいくらいの山道も搜索は可能なのに。

「それが繋がらなかったんですよ。電波塔に何か不具合があったのではないのでしょうか。何度も連絡は入れていたのですが」

何気なく携帯電話を開いて見てみると、

「あれ、電波が無い」

昼過ぎまでは確かに二本程入っていたはずなのだが今は圏外を表示している。たしかこの屋敷の裏には電波塔があったはずなのだが。

「あ、俺のもだ」

いつの間にか俺達の携帯電話が使用不可能となっていた。

かつて人が消えた屋敷。そして、今まさに行方不明となっている長女夫婦の娘。警察に連絡しようにも携帯に電波が入らなければ設置型電話に頼るしかなくなる。

問題は設置型電話も使用不可能となっていた場合、車を出し、直接警察へ出向くことになり搜索時間を大幅にロスしてしまう。夜道の山道となれば足場が見えなくなり危険性が高くなる。それに警察へ今さら出向いたところで本格的な搜索は明日以降となるだろう。

「……あの、雨が強いと言ってもまだ今なら視界が効きます。私達で山道沿いだけでも探すことは出来ると思うのですが」

とにかく、ここは人命救助が優先だろう。あれやこれやと話し合っている間に土砂崩れにでもあつたら大変だし、動けるうちに動くのが有効である場合が多い。

「……うむ、小僧の言う通りじゃ。寿美子よ、すぐに警察へ連絡を。大雨ではあるが今なら搜索が可能だろう、事情を説明してなるべく人数を集めてもらえ」

「かしこまりました」

警察とレスキューが来るまでも時間がある。だが俺達が動いて

いればタイムラグ無しで搜索が可能だろう。

動くとなれば早めが肝心。目配せで弘矩と拓也に行けるかどうかを問うと、二人とも首を縦に動かした。

「ま、地元の山脈の方がよっぽど険しいもんだったからな、このくらの森、なんてこたあないだろうよ。ガキの頃あ、山猿と呼ばれた男だぞ？ 任せろよ」

「俺も問題ないよ。ばあちゃんの家ってこのくらいの森に囲まれているし。それに行方不明のお嬢様の救出ってフラグだろ？ だろ？」

よし、いつも通り狂ってやがる。心配無用。

後は使用人さん方だが、

「我々も行きましょう。ロープとライトを用意しますので少々お待ち」

陣頭指揮を取る一二三さん。確かに、搜索に向かう使用人の中では一番年長である、そのポジションに収まってもらうのがちょうど良いだろう。

とりあえず俺達三人、そして一二三さん、太刀音さん、そして姪っ子が行方不明でじっとしていられるか、と言って協力を申し出た理一郎さんと雄司さんが搜索班となった。

後は、荷物を集めて屋敷外に探しに行くだけ。

居残り組が警察に連絡を入れるのと同時に俺達も準備に掛かった。備蓄倉庫に荷物を取りにいった一二三さん達を待つ間、何人一組で手分けして探すべきかを玄関で考えていた俺にレインコートを着た朔馬が声をかけてきた。

「真人君、僕も搜索に加わるよ。人数が多い方がいいでしょう？」

「いや、朔馬はここにいてくれ」

「えっ、なんでさ」

細めの身体、いや、華奢な身体の朔馬には荷が重すぎる。

山中行軍、しかも雨の中の人探しなわけだし、足を滑らせやすい体形と言うのは、重心が高い位置にある者だ。

一概にそうとも言い切れないが、同じように弘矩も細めの体形と

言えるが、あいつは意外な程筋肉を持っている。バランス感覚も人一倍。拓也にしても普段の足運びから弘矩並みのバランス感覚を持っているのが見てとれる。

秋雪さんと理一郎さん、使用人の人達もガタイは悪くないし、自分の限界以上の行動は取らないだろうし、雄司さんは細長い印象だが無茶するような人には思えない。

だが、朔馬の場合は、筋肉のつき方は、成人男性の並み以下、バランス感覚はどうだか分からないが反射神経も人並みだろうと判断。二次遭難の危険性がある以上、危なっかしい因子を連れていくのは避けたいところだ。

「連れてこうぜ、確かに人手は多い方が良いだろ」

「あのな弘矩、俺はこいつの心配を……」

「だったらお前が面倒見てやれよ。心配なんだろう？どっちにしても目の届く場所にいりゃ、お前がサポートしてやれるだろ」

まったく無責任なことを言う。そりゃ人手云々は正論だが、俺が面倒見る事になるのは筋違いだ。だったら最初から連れて行かない方がいいだろうに。

「とにかく行くぞ。一二三さん達が来たし、朔馬もカップを着てるんだ、断る理由は無いだろ」

「……わぁーったよ。んじゃ行こうぜ、朔馬。ただし、俺の後ろを歩けよ。あと一人で動くな。何かあったら教えること。守れるな？」
「はいっ、分かりました！」

レインコートの帽子を目深に被り、外に出た。

周りの木々は、昼間とはうって変わってゆらゆらと風になびき、雨粒が幹を叩き、不気味な音色の不協和音^{コントラスト}を奏でる。人類が神様とかゆつ偶像を信仰する以前から畏敬を抱き、崇められた原初の森とも言つべき光景だろう。

こんな森を一人で過ごしているようじゃさすがに神経がまいるのも時間の問題だろう。今は、一刻も早く彩葉さんを見つけ出してやるのが先決だろう。

意を決して外へ走り、止められた車に俺達は飛び乗り、赤いテールランプの尾を引いて、一路敷地の外、山道を目指して走りだした。

確氷家の家系と危機的理論武装

吹き付ける止まらない風。それは、すでに強風と呼ぶ類いで、右側面から押すような強さをもって吹きすさぶ。

風と共に雨脚も強まり、山狩り中の俺が、バケツいっぱいに入った水を頭からかぶったような濡れ鼠になるのにたいした時間はいらなかった。

「クソ、結構ぬかるむな。朔馬、ついてきてるか？」

「大丈夫です。……それにしても、予想以上に深い森ですね。傾斜もあるようだし」

山道の周辺を探すだけ、と言っても全長5キロばかりの捜査範囲をたった九人で動くのはシンドイ。

単なる山なら、軽快に動ける自信がある。しかし、強風と豪雨は、俺から体力をドンドン奪っていく。

視界は、ほとんどさえぎられ10メートル先すらばやけて見える。細心の注意を払い、ゆっくりと山道に戻ってきたら連絡役として待機している雄司さんがこちらに気づいた。

「何か見つかったかい？二人とも」

「いえ、とりあえず50メートル程奥に行ってしばらく探してみましたが車体どころかタイヤの痕一つありませんでした」

八人を三人二組、二人一組の三組に分け、山道入口、中間部分、屋敷側を手分けして探すことになった。俺と朔馬、雄司さんは、屋敷から一番離れた山道入口の部分を担当していたが、見つかるのは不法投棄された粗大ゴミと思われる残骸とビニール袋やダッチワイフの成れの果てであるビニール人形。

リサイクル、リサイクルとこれだけ騒がれる世の中になる以前の代物なのだろう、全て草や蔦に侵食されて木々が侵食無機物の墓場にしか言い様のない風景があるばかりだった。

「……そうか、車で屋敷に向かったとしたら何かしらの痕跡があっ

てもいいはずなんだがな。霞の様に消え去ってしまったわけでもないのだし」

「ごもつとも。反対側の森に何かしらの痕跡があればいいのだが、そこにも手掛かり皆無なら後に来る警察の捜索隊頼みだ。」

「ところで、大学生なのかな？君らは」

「はい。仙台市内にある大学に通ってます。そーいや朔馬は、この学校に行ってるんだ？」

何気無いことだが、そう言えば、俺は朔馬の事を全く知らない。どこに住んでいるのか、なぜ茉莉と知り合いなのか、どうゆう事情でこのハウスキーパーのバイトを始めたのか、どんな人間なのか。今の今まで、気にもならなかった事柄だが、気になりはじめると波のように次々と疑問が押し寄せてきた。

「朔馬？苗字は何と言った、君は？」

「僕ですか？僕は、東京にある大学に通ってます。あと苗字は碓氷と言います。石と、唯から口を取った字の碓と氷で碓氷です」

それを聞いた雄司さんは、驚いたような声を上げた。

「碓氷 朔馬！？お祖父さんは碓氷ウスイ 朔月サグツキさんかい？」

朔月？誰だ、それ？

「はい、祖父は碓氷 朔月。碓氷探偵事務所の先々代所長です」

「やっぱりそうか、20世紀最高と誉れ高い探偵の親族と会えるなんて思いもしなかったよ。お元氣かい？朔月さんは」

碓氷 朔月という人は、どうやら有名人らしい、ということは予測可能だが、名前を聞いたことはない。

「あの、すみません。碓氷 朔月さんってどうゆう人なんですか？」
素直に聞いておこう。朔馬の事も知っておきたいしな。

「そうか、うん、知らないのも無理はない。歴史の表舞台にはほとんど現れない人物だったからね。戦後、アメリカ合衆国で活躍した伝説的探偵だったんだ。主にFBIの極秘捜査に外部協力者として参加していたらしいんだが、科学捜査至上主義のご時世だった60年代、綿密な現場捜査といやらしい程の粘着質な聴き込み。そし

て、常識に捕らわれない推理力で数々の怪事件や難事件を解決に導いた人さ。代表的な事件は、アイアンハワード邸殺人事件、CIA内部情報漏洩事件、ワシントンDC連続猟奇殺人事件などで活躍した名探偵で、FBIの切り札と謳われた人だよ。碓氷 朔月さんは」

聞いているだけで凄そうな人だな。それにしても、雄司さんの顔が生き生きとしている。よほど朔月という爺様をリスペクトしているのだろう。

「へえ、朔馬のじいちゃんってそんなにすごい人なんだな」

「うん、白いスーツと白い帽子がトレードマークで、“探偵は、いつもハードボイルドであれ”って口癖だね。」

……いや、その台詞の意味は、分からないが。

だが、自慢気に祖父の話をする朔馬の顔は、この三日間の中でも明るい表情だった。それほどに祖父思いなやつは、そうはいない。家族を大切に思ってる奴に悪いやつもない。

こいつとはいい友達になれそうだな。

「僕のじいちゃんの話は、これぐらいにして反対側の搜索を始めましょう。そこも探し終わったら一度他の搜索現場に行ってみましょう。それに、そろそろ警察にも動きがあってもおかしくない頃合いですしね」

「そうだな、そのはずなんだが、それらしい車が全く通っていないのが気になるところだな。警察は何をしているんだ」

「たぶん、まだ溪谷辺りを走っているんじゃないですかね？ここから麓の警察署までけっこう距離ありますからね。……さてと、朔馬、行くぞ。とにかく今俺達にできるのは足で動いて何か手掛かりを見つけることなんだからさ」

各々気を取り直し、俺と朔馬は深い森を見つめここに何らかの手掛かりがあることを期待した。

暗い森の内部は、先程探した場所と変わり無いものだった。

無機物の墓場、卒塔婆の様に乱立する苔むした木。

風雨とカビ、湿度によって倒壊した山小屋。

山の動物が絶滅したのかと言う程、生物の気配が皆無。先程と同じく誰かがここを通った形跡は、見られない。

「つと、下の方が開けてるな」

よく見てみれば右手側が段差になっていて、四方、5メートル前後の空間。さらに、俺達の進んできた獣道のすぐ隣には、使われなくなつて久しいのだろう、荒れ放題だが車が何とか通れるくらいの幅を有した通路。

木々に囲まれていたこの森において、こんな空間は、目立ちすぎる。

……何かあるのか。

「そうですね、車を止めるスペースも確保できている」

後ろから覗きこむ朔馬も俺と同じ発想らしい。

だが、朔馬の予想は、俺以上に踏み込んだものだった。

「ここは、山道から30メートル程離れた場所です。向こう側の開けた砂利道を使い、山道の入り口付近から進入して車を乗り捨て、彩葉さんを連れ去る為の車に乗り換えることも可能でしょうね」

「は？そりゃ誘拐つてことか？いや、でも誰が、何のために？」

「あくまでも最悪の可能性の話です。誰と言えば一緒に行動していた専属使用人の葉路さんの可能性がもつとも高い。目的は、分かりません。身代金が駆け落ちか。考えればきりがありません」

物騒な話だな。そうゆう発想をするのが流行ってるのか？いや、確かに誘拐ならば、相手は大富豪である水菱一族だ。交渉しだいじゃ、数億円くらいの身代金を提示しても出してくるかもしれない。

とは言えその後に警察から追われるはめになるのは自明の理。金を手にいれた後で使えないのであれば、何のために危ない橋を渡り、逃亡劇を演じなければならぬのか、と虚しくなってしまう。

バカバカしい犯罪に手を出して、その後も追われる身。リスクがありすぎて俺なら手を出そうと思わないな。

だが、俺と同じような考えの人間だけでないのも事実だ。実際、たかだか3万円程度 of 金欲しさに殺人がおこる世の中だ。

いや、俺にしても残りの人生において、使いきれそうにもない金額を目の前にぶら下げられたとしたら？

……どうだろうな、としか言い様がない。

「どうかしましたか、真人さん？」

「いや、何でもなし。うん、2メートルくらい段差あるだろうから朔馬はここで待っていてくれ」

「いえ、僕も行きます。これくらい問題ありませんから！子供扱いしないでください！」

子供扱いしてるわけじゃないんだがなあ。足滑らせて下の石にぶつかって怪我でもされたら俺の監督責任になるわけだし。

ま、いつか。本人の主張は、尊重してやらないとな。

「オッケー、オッケー。んじゃまず俺が降りて下を確認してくつから」

「大丈夫です、って言うてるのに……」

ぶつぶつ言うてるけど、山道舐めたら危ないんだよ。地元じゃ昔から山菜取りに行った素人さんが行方不明になってる話が尽きないしさ。

段差、と言っても、おそらく地盤がずれるか沈下したのだろう。根っこを剥き出しにした木がくぼみを囲んでいるので、これをつたって下に降りた。

周りを確認してみると、夜の闇に包まれかけていくくぼみの奥、雨粒のカーテンに遮られるかのように一台の黒塗りベンツが車体の所々をへこませながら止まっている。

当たり前だ！

車はまだ新しい。つまり、彩葉さんと葉路さんが乗ってきたのは、これで間違い無いだろう。

あとは、二人とも中に居てくれれば一件落着。よかったよかった、となるはず、

「う、うつわあああああ!？」

「あ?つて、やっぱりな!!」

悲鳴が聞こえたら方を見上げてみたら案の定、朔馬が足滑らせて、落下する瞬間だった。

下は泥でぬかるんでいるだけだから、たいした怪我もしないだろうが、泥まみれになるのは、さすがにかわいそうだ。

落下点に入り、両手をすくい上げる格好で、キャッチ。

衝撃をやわらげるため、ある程度肩を下げたおかげでダメージはほとんど無いはずだ。

「きゃん」

「ん?」

右手は朔馬の肩から少しずれて胸を、左手は尻から腰をしっかりとホールド。

手に伝わる感触は、男じゃ考えられない程柔らかい。擬音で表現するならプニ。

そして右手が無遠慮に俺の脳内に送る感触の判定は、間違いなく女の子特有の柔らかさ。

つまりは、オッパイ。

執事服に違和感無く収まるくらいだから小さいのか、とも思うが押すとしっかり跳ね返してくるさわり心地から片手に収まるちょうどよさ。

冷静に判断すれば、はなはだ失礼な事だと思うが、これは、男の習性だ。死ぬまで治らん不治の病だ。

そこにオッパイがあれば、否、事故であつたならなおさら怪我が無いか入念に精査するのは、むしろ必然!

俺に落ち度があるとすれば、上に朔馬を残してこなかったことだ。だから怪我が無いか調べるのは自明の理!

よし、じゃっかん混乱しているが理論武装と言つ名の言い訳としては、一応筋が通るはず。

悲鳴を上げたり罵詈雑言の嵐をくらおうとも俺に非は無い、無い

だろう！？

「……あの、揉んで楽しいものでもないので、そろそろ降ろしてください」

「……ああ、わるい」

だから、そんな冷静な返しが来るとは思いもよらず、俺の思考は氷ついた。

隠し事とドライな人間

ちよつと待て、待つてくれ。とりあえず状況を整理しよう。

俺と朔馬と水菱家の養子である雄司さんは、山道入口側で連絡の取れなくなつた長女夫婦の娘、彩葉さんと使用人の葉路さんを探しに来ていた。そう、まったくそれで間違い無い。

山に沿つて作られた山道の山頂側を探して何も見つからず、反対の渓流側を探している途中、妙に開けた空間を見つけた俺と朔馬は、2メートル程の段差を降りたわけだ。

それがどうして朔馬をお姫様だつこして、執事服着てるから男とばかり思つてた朔馬が女の子だったという真実を受け止めることに？
しかも、事故とは言えよりもよつて朔馬の乙女を驚掴みにして確認しているこの状況。

あれ？あれ？アレエエ？

「そうか、これがリアルにおけるフラグかつ!!」

「いや、あの、真人さん？何を言つて……」

そうだ、落ち着け、俺。ここでヘタに滑つてみる。朔馬が俺に対して抱く印象が変態になつてもおかしくはない。ここは、まず落ちて着いて朔馬を腕の中から解放するんだ。柔らか過ぎてこっちの脈拍が飛び上がつてることを悟られる。

ああ、くそ、柔らかいなあ、いい香りだなあ。

いや、待て、時よ止まれ。無理なら思考よ止まれ。ここは、機械的動作で朔馬を解放しろ。このままじゃホントに変態だ。

「いや、わり、……ほいっ」と

慎重に、しかし、最低限の動作でこれくらいのこと何でもないと言つふりをして朔馬の足を地面に下ろす。

よし、後は腕を離せば状況は変わる、そう、変わるんだ！

「あの、ありがとうございます。助けてくれて……」

顔を伏せ目を合わせない朔馬。

え、距離を空けられた？引かれた？キラワレタ？

混乱してマイナス思考しか考えられなくなるのは悪い癖だと冷静な人格が脳裏で囁くが、だってこれ！この反応、絶対嫌われたって！そりや事故とは言え同意も無く胸揉んだんだぞ？いや、同意しても恋人同士でもないのにそんなことしちゃダメだろ。

ああああ、どうしようどうしよう！？

「驚き、ましたよね。執事の格好してるし、名前も男の子っぽいし」混乱状態を終息させるために深呼吸をしていると朔馬がポツリと漏らした言葉。

そりや驚いた。ああ、男だと思ってたら女だった、なんて驚いてもしようがないだろ？

けどまあ、それだけだろ？

そう思うと精神の土台辺りが固さを取り戻して通常思考にシフト。さよなら、混乱状態の俺。

「ん、まあ、そりやな。あ、皆には黙つていた方が良いのか？」

と言うと今度は朔馬が驚いたように顔を上げた。

「え、うん。茉莉は知ってるけど、できれば他の人には……」

「オツケー、オツケー。んじゃ、あそこにある車を見に行くか」

「あのっ、それだけですか？僕が何で性別を隠してるのかを聞いたりしないんですか？」

まるでそうしない俺が変だと言う。

そりや、朔馬がこれまで出会ってきた人間が朔馬の隠し事にずかずか踏みいつて来るような無礼者が多かっただけで、俺もそうだと断定するのは、早合点だろう。

「ん、別に？男でも女でも気にならないけどなあ？ただ予想もできない部位があったからびっくりしたけど」

偽りざる本心。

生憎、俺は、主人公属性と世間で言われる代物なんか持っていない。こうゆうシチュエーションで気の効いた格好良い台詞なんて言える性格じゃないんだ。だからモテた試しがないんだろっ、と後ろ

向きに自己判断。

「……そう、なんですか？じゃあ、あの、今は、忘れてください！後でちゃんと説明しますから」

「分かった。まあ、話したくなったら話せば良いよ」

すると疲れた様に朔馬は、肩を下ろした。どうしたんだ？

「真人さんって、聞いてた以上にドライな人なんですね」

「そうか？まあ、よく言われるけど」

それと朔馬が肩を下ろした事と何か関係あるのか？

「はあ、なんだか自分がバカみたい。……車、見にいきましょう」
うん、そうしよう。

地面は、ぬかるんでいるが底無し沼と比べればまだ安定しているので歩きやすい。最短距離でベントツに回り込み、誰か居ないか、とスモーク処理されたガラスに額を押しつけ覗きこんだがなんにも見えない。

当たり前か。

「真人さん、何してるんですか？」

見て分らないか？誰か車内に居ないか確認しているんだよ。

「そんなことしたら中の人が怖がりますよ」

おいおい、俺の顔が怖いって？

「いきなり顔を窓に押しつけるような人、けっこう怖いですって」
見ず知らずの人間が無言で顔面を近づけて来る。

……ホラーだな。

「……確かに。でもこうゆう車の中に居る人とコンタクト取る方法って？」

「普通、ノックして判断しません？」

数秒の黙考。後に稲光の様に閃く思考。

「……その手があったあ！！」

「え？素で気づかなかったんですか！？もつと常識を覚えましょうよ！」

はい、まったくもって。とりあえず、後部座席のドアをノック。
反応無し。

「誰も居ないのか？」

「どうでしょう？それより、どうします？雄司さんへ知らせに行きますか？」

ふむ、この辺りを少し調べた方が良いか？いや、車の中に居ないところを見ると雨が降るより前に車を出た、ということならこの周辺にはもう居ないのでは？

ガチャ。

「あれ、鍵が掛かってませんね？」

「だからって何故開ける」

俺に常識とか言った人間の行動とは思えないぞ。なんてツツコミが喉まで出かけるが、わずかに開いた車の中から何かの動く音。

何かいる？

「ひっ！？」

若い女の押し殺した短い悲鳴が聞こえ、俺と朔馬は、目配せで確認。

ゆっくりとドアを開けた。

暗い車内の後部座席に横になった姿でこちらを睨む、綺麗な金髪と陶磁器の様に滑らかで白い肌を持つ女性がそこに居た。

家族構成の資料で見たことのある美貌。

どうやら探し人が見つかったようだ。

「水菱 ミスヒシ 彩葉様 アヤハ ですね？ご当主、宗継様の命によりお迎えに参りました」

奇妙な友情

「宗継？……おじい、さま？」

不思議そうに首を傾げる彩葉さん。自分の祖父の名前にピンと来ていない様子。

どうやら少しばかりボケているようだ。

「えつとですね、私は神栖 真人と言います。こっちは碓氷 朔馬。失礼ですが、ご自分のお名前は分かりますか？」

「わたし、水菱 彩葉……」

うーん、どうしたんだ？ なんだかフラフラしていて、未だに夢の中にでも居るようで、目の焦点が合っていない。

……思いの外、精神的に追い込まれていたのかもしれないな。

「真人さん、僕は雄司さんに知らせてきます。ここを頼んでも良いですか？」

「ああ、気を付けてな」

とにかく、こんな広い森の真っ只中でよく見つかったとしか言い様が無い。

車の状態を見るに、何かの拍子に山道からコースアウトして幸運にも開けた場所で停車することができた、ということか。

よく木と正面衝突しなかったな。

しかし、本来ならいるはずの人間が一人足りない。

「彩葉様、彩葉様の使用人である甘木 葉路さんは、どちらに？」

そう、彼女専属の使用人、甘木 葉路が居ない。

てっきり一緒かと思っていたのだが。

少なくとも、朔馬が言っていた営利誘拐や駆け落ちの類いではなかった、と断定できるが、これは……？

「葉路なら、助けを呼んで来るって。わたし、あたま、うつちゃって」

なるほど、出血は無いようだが頭部を打ち付けたとしたらヘタに

動かすのはまずい。

いや、待て、葉路さんは、助けを呼びに行った？ だったら何故屋敷に到着していない。いくら山道といっても十キロもあるわけじゃないのに。

3 時頃に屋敷に着くように向かっていたとしたら万彩夫妻到着以前に駆け込んで来てもおかしくないはずだ。

…… 山道に出ずこの山の中を進んだ？ 確かにそれならまだ葉路さんが屋敷に現れていないのも合点が行く。

でも何故、山道に出なかった？

方向感覚を失ってどちらの方角に山道があるか分からなくなった？

山道に出る前に足を滑らせ、さらに溪谷側に落ちた？

どちらにせよ遭難という事実には変わりはない。そうすると身一つの人間を探す事になるが、この森の中から探し出すのは、彩葉さんを見つけた以上の幸運に恵まれない限り不可能だ。

「ひつく、…… ひつ、く。…… 怖かった。…… 怖かったよお」

「あ、ちよつ、彩葉様？ いや、そんな、大丈夫ですよ。安心してください。すぐ御家族が待っている屋敷に行きますから」

「怖かったんだからああ、…… うわあああん！」

年の頃は、俺と違わないはずの人間がここまで泣くのか？ 留学経験とか、社交デビューとかで世間慣れしている人なのだろうと思っていたのだからな。

…… いや、関係無いか。どんな人間であれ、事故った後で暗くなりつつある森の中、一人ぼっちで車に残され助けが来るのを待つ。やはり、怖くなって当然だな。

「大丈夫です、ここにいますから。もう一人で、耐えなくてもいいですよ」

ああ、もう。だから、俺はこの手の台詞が苦手だったのに。

口から吐き出すような言葉は、つかえつつかえで聞き取りづらいし、言っている本人だって惨めなもんだ。

マンガやアニメの主人公だったなら平然と口にする台詞はリアルな

人間が口に出せる言葉じゃないんだろう。

きつと異世界の言語だ。二次元と三次元の壁は、あまりにも分厚い。

……何を言っているんだ、俺。そうじゃないだろ。

「……クスツ、……うん。……ありがとう」

雨の音に溶けてしまいそうな程小さな声。

それでも、自分の近くに人が居るということは、少なからず彼女に安心を与えられたのかもしれない。

その言葉を最後に彼女は、意識を失ったようだ。

綺麗に整えられた化粧が涙に濡れて滲んでいるが、とても健やかな寝顔だった。

十数分後、雄司さんをはじめとした搜索班の朔馬、拓也、理一郎さん、一二三さんが駆けつけ、彩葉さんを寝かしたまま俺達が乗ってきた車まで運び、急いで屋敷に戻るようになった。

後部座席に彩葉さんを横たえたので送り届けるのは理一郎さんと一二三さんに任せて俺達年少組と雄司さんは、もう一度この辺りを探すことにした。

遠ざかるテールランプが見えなくなるまで見送って、一同同時に深呼吸で一息。

まだ行方が分からない人がいるとは言え、とにかく一人の命が救われたのは、紛れもなく喜びに値するものだったのだから。

「いやあ、とにかく見つかってよかったよ。真人、お疲れ様」

ねぎらいの言葉、ありがたいね、拓也。ただどさ、手放しに喜んでいられない状況だよ。

「でも、身一つの葉路さんをこの森から探すとなると、本気で人数が足りませんね」

朔馬の言っている事は正しい。しかも、マジで天気が悪化、夏場だったのに午後7時半を少し回っただけで辺りは暗闇と雨粒が周りを支配している。

そして、時折響く雷鳴、風も先程より強くなっている事を考慮すれば、あまり時間は残っていない。

今は、拓也達が乗ってきた車のヘッドライトで各々の位置を確認出来ているが、森の中に入ったら頼みの綱は、手持ちのライトのみ。あまりにも心許ない装備に溜め息が出る。

「溪谷側を50メートル付近まで探し、それでも見つからない場合は一度切り上げるしかないだろうな。残念だが」

「……ですね。彩葉様の話通りなら、葉路さんは屋敷側に向かったそうですから屋敷周辺を探している弘矩達が見つけてくれていれば良いんですが」

俺と朔馬、拓也の三人が搜索に回り、雄司さんは、変わらず車で待機してもらうことにして都合三回目の山狩り。

一番山に慣れている理由から俺が先行し、後ろに朔馬は変わり無いがサポートに拓也が挟むようにカバー！。

よく考えてみれば彩葉さんと葉路さんが事故ったのは、逆算して約五時間前。それから屋敷側に向かったとすれば、車の周辺に葉路さんがまだ居る可能性は低い。

だが、直後に溪谷に落ちたか、何らかの事情により身動き出来ない状態になっている可能性が捨てきれない以上探さないわけにはいかない。

「真人さんって結構、正義感強いんですね」

「え？」

そんなこと、言われるなんて思いもなかった俺は、朔馬が何を言ってるのか理解出来なかった。

「だって、初対面の人達の家族に対して、そこまで真面目に探してあげられる人、そんなにいませんよ？」

「……んな訳ないだろ。単に仕事だよ。手え抜いて給料払わない、なんて言われたらたまったものじゃない。ビジネス。ボランティアじゃなくて、単なる作業なだけだ」

この俺が、正義感強いって？そんなこと、言われたことなんて一

度もないよ。

「作業、ですか？」

「そ、俺は、契約通り、額面通りの金額さえもらえれば、わざわざこんな悪天候に山狩りなんてしたくもない。ああ、そうだ、夏休み中に使える金さえ手にはいれば……」

「……」

なんだよ、この無言の間は。間違った事を言った覚えは無いぞ。

「まあ、悪く思わないでやってよ。真人ってさ、誉められると逆に否定する奴でさ。照れてるだけだよ」

こら、拓也。何言ってるんだよ。

「真人も少しは素直になれよ。そんな言い方してるから友達少ないんだぞ？」

「うつ、……別に、多ければ良いって訳じゃないだろ。それにゾロゾロつるんで歩くの嫌だし」

「でも一人ぼっちも嫌なんだろ？」

「それは……」

「ホントに素直じゃないな、真人は」

喧しい。

聞こえないふりしてずんずん前進。

別に、友達が多いから社交的とか、少ないから内向的とか、そんな偏ったパーソナル情報で人を判断するのは間違ってると思うんだが。

二人の声が聴こえなくなる程度の距離まで離れる事にした。

顔が赤くなっていることは、自分でも理解しているしな。

「口では、ああ言ってるけど良い奴だよ。なかなか本心言わないから誤解されやすいんだけど、困ってる人見るとほっとけない性格でさ。何だかんだ言いながら手を出して、俺と弘矩二人も巻き込んで大事になるんだよね」

「それは、まあ。さっきは、僕の事気にかけてくれたり、いろいろ

あつたので、いい人だつていうことは分かりますけど。なんでそんなに本心を隠そうとするんでしょうか？」

朔馬の疑問は、だいたい真人と初めて会ったほとんどの人間が感じる疑問だ。

自分達もそうだった、と思い起こす。

「そうだなあ、いつか真人と飲みに行きなよ。酔って口数が増えたら、ポロつとこぼすかもよ？」

拓也が真人の抱える闇の一端を悟ったのは、その時だったから。たぶん、一生かかってもその闇は、真人から消えはしないだろうと拓也は予感している。

子供の頃に刻まれた傷は、治ったと思っただけでも根深く精神の奥底に居座るものだから。それこそ、拭いきれない頑固な油污れのように、後ろを向いたら、そこに予期せず存在するゴキブリのように人は、生きていく内にトラウマなんかを克服していける、なんて御題目を見ると拓也はヘドが出るくらいに思っている。

「……いいじゃないか、別に嫌なこと、臭いものに蓋したってさ。」

どっかの主人公みたいに諦めないとバカみたいに叫び続ける奴を拓也は、根っから信じる事ができないだろうと思っている。

ほどほどに矛盾や傷を背負いながら、文句や愚痴を日々口にして、それでも一握りの幸せってやつを追いかけて生きている人間が一番人間らしいと思っている。

そんな中でも真人や弘矩は、見ていて飽きない連中だ。

だからなんだろう、拓也が他の二人と一緒にいるのは。

「拓也さんは、教えてくれないんですか？」

「んー、プライベートなことだからね。それに、攻略ルートのネタバレ教えられたらやる気なくしちゃうじゃん？」

「攻略、るーと？なんですか、それ？」

「……ほう、無垢な子羊がいたものだ。人生のバイブルたるエ。ゲーを知らぬとは、人生の悦楽を知らぬようだな。よかるう、このバイト終わったら打ち上げやるうじゃないか。そして俺の聖域（押入れ）」

から選りすぐりを選別し、贈呈しようじゃないか、そうしよう。

……つまるところ、この二面性、人間の酸いも甘いも受け入れて、真面目に二次元を楽しむオタク魂を持つ人間が羽佐間 拓也という人格。

「おい、なにやってんの？この先、崖なつてっから、少し大回りして雄司さんとか戻ろうぜ」

ちょうど真人が雨のヴェールから姿を表した。

三人で合流してから明るく光るヘッドライトの方角に回り込みながら昇る真人の背中を見て拓也は、ふと思った。

「こいつの後ろに隠れてる悪意。それがどれ程のモノであれであれ、こいつは今、他人を気遣う気持ちを持っている事に違いは無い。お節介とは分かっているが、手を貸したくなる。近所の年下の小僧みたいなやつで、なに仕出かすか、一番近くで見ていたくなる。」

「ーもしかしたら、弘矩もそうなのかもしれないな。」

ぬかるむ地面を踏みしめ、スキップする要領でその背中に追いつく。

「あまり遠くに行くなよ。視界悪いから見失ってしまいそうになるからさ」

「わあったよ。てかな、聞こえてたぞ、誰が厄介事に巻き込んでるって？いつも二人して勝手に首突っ込んでくるんじゃないか」

「ハハハ。そのわりにいつも相談してくるのは真人だろ？お節介焼きなんだよ、俺も弘矩も」

「くっ。頼んだ覚えはないんだから感謝はしねえぞ」

「ホンツと、ツンデレだよなあ」

「誰がツンデレだ！誰が！」

いつもの調子。

いつもの会話。

いつものやり取り。

そんな日常が、屋敷に戻った時、音を立てて崩れることを二人は、まだ知らない。

失踪：水菱屋敷連続失踪事件

戻った先の屋敷では、騒然とした、と言ったら語弊があるかもしれないが、居残り組の人達と先に戻った人達が騒いでいた。

屋敷の周りにまばらに散らばるライトの光線が伸び、何人かが外に出ていることが分かった。

「いったいどうしたんだ？」

「わからないが、ただ事じゃないぞ。雰囲気だ」

たしかに。ライトは挙動不審に落ち着いていない。こんな雨の外に出ている時点で穏やかじゃないことは確かだ。

彩葉さんは、見つけて屋敷に送ったのだ。その関連による騒ぎなのか？

頭の中で考えを巡らせるより聞いた方が手っ取り早い。

ちょうど車の進行方向に立っていた茉莉に声をかけた。

「あ、やっと戻ってきた！」

「どしたんだ？彩葉様だったらさっき一二三さん達が送ったはずだから？」

「それならさつき着いて彩葉様にはお部屋で休んでもらっているわよ。そんをなことより、彩登美様がいなくなっちゃったの！」

「何？」

彩登美さんがいなくなつた？

「それは確かか？どっかに引き込もつてるとかは……」

「本館中の部屋見て回つてもどこにもいなかったの！」

だとしたら外か別館、もしくは倉庫にいるのでは？

「今宗明様と華織様と寿美子さんが別館と倉庫を探しに行ってるんだけど見つからないみたいなの」

「……茉莉。それに気づいたのはいつ頃なの？詳しく聞かせて」

後部座席に座る朔馬がずっと前のめりに茉莉から事情を聞き出そうとしている。

だよな、展開が理解不明という時点で動くのは危険。何事が見落とす事があるだろうしな。

「うん、えっと。朔馬達が彩葉様を探しに行つてすぐに寿美子さんが食堂から出て行つて、居残り組はそこに待機していたんだけどそれから直ぐに寿美子さんが血相を変えて戻ってきたの。そしたら……」

食堂のドアを破る勢いで当主付使用人、山内 寿美子が年甲斐を感じさせない速度で転がり込んできた。

「旦那様！ たた、大変です！ 電話が、電話が切れてしまいました！」「何だと？……。どうゆうことだ。電話が切れたとはどうゆう意味だ！」

予想外の事態に動揺する寿美子。

宗継にしても寝耳に水だったのだろう、うるたえたように声を荒げ、説明を求めた。

「警察の方にお嬢様が行方不明だと説明して。いつ頃こちらに到着されるかお尋ねしていたところ、突然電話が途切れ……」

「むう……」

設置電話が切れたと言うことはここまで伸びる電線のどこかが断線したのか。

しかし、それなら全ての電力が落ちていないと不自然だ。

「お父様、私が車で直接警察に行くわ！ こんなところで手をこまねいていられない！」

「いかん！ 外は雨で地盤が弛んで、いつ土砂崩れがおこるか」

「それなら、なおのことよ！ 私の娘は、そんな危険な場所に居るのよ！？ 私が助けに行かないで誰が行くの！！」

純粹に娘を思う気持ちに偽りは無い。そして、そんな彼女を止められる人間は居なかった。夫である秋雪すらも。

「彩登美！ 気持ちは分かるが、今いたずらに行動して君が何らかの災害に遇つたら……」

「何よ！だったら、あなたも彩葉を探しに行きなさいよ！父親だつていうのに何でここに残ってるのよ！」

「それはっ！」

「ええ、そうよね！？あなたはいつも冷静で落ち着いて正論を言う人だもの！今だって彩葉を探しに行かない理屈を頭の中でこねくり回しているんでしょ！？父親の自覚が無いの！？だったら一生ここに居ればいいわ！私は、彩葉を助けに行く！！」

「彩登美っ……………」

「彩登美様……………」

自分の夫、そして、古くから自分を支えてくれた使用人の言葉も、彩登美の沸騰を抑える事はできない、いや、二人が彩登美の名前を言うだけで彩登美は、虫酸が走る思いを感じた。

「もういいわ！今すぐ警察に行ってくる！あんた達は何もしなくていいわ！！」

「……………っ！」

そう啖呵を切って食堂を飛び出した彩登美。秋雪は、後を追おうとしたが、ふたたび口論になると思ったのか椅子に腰を下ろした。

「宗明さん……………」

「わかつている。だが、彩登美もいい大人だ。いつまでも私達が諫めていてはいかんだろっ」

そんな長男夫婦の小声の会話が筒抜けに聴こえるほど重苦しい空気の中で宗継は、ひたすら瞑目。美乃里は、面白い見せ物を見物したような顔で微笑み、彩那は、何が起こったのか理解できずに、どうかしたのかと万彩に聞いているが、なんと答えるべきか迷う母親。使用人達は、まるで物言わぬ置物のように各々、仕える家族の後ろに控える。

「困った娘よ。…………あの気性は、母親にそっくりだ。寿美子、電話機を詳しく調べよ。この屋敷の電力が全て落ちていないならば故障しているのは電話線だけだろっ」

「かしこまりました」

今一度、寿美子がロビーにある電話機に向かうために食堂を後にした。

「詩織、彩登美と一緒に行ってくれ。君は彼女と警察に行って事情を説明するんだ」

「私などよりも秋雪様が一緒に行かれた方が彩登美様は……」

「いや、今私が行ってもな……」

結果は目に見えている。ならば彩登美を古くから知る詩織が一緒に行った方が落ち着きを取り戻せるはず、と秋雪は考えた。

兄弟夫婦からなんでしょうと、秋雪はこれから動く気は無かった。

警察へは連絡が取れないが、使用人と義兄弟達が娘を探してくれている。本音を言えば自分もその捜索に参加したい。しかしだ、自分が今、平常心でいるわけではないのは言わずもがな自覚している。彩登美は、秋雪が冷静だといったが実際は違う。先程も彩登美が激昂した時、怒鳴りたい気持ち在必死に抑え込んだ。ふだんなら、より冷静に彼女を落ち着かせるはずなのに、と秋雪は、そんな自分の精神状態を分析した。

やはり普段通りではない。混乱しているようだ、と。

そんな人間が山道や足場の不安定な森の中を歩けば事故を起こしかねない。ならば一時、この屋敷で頭を冷やして後に探しに行く。

「さあ、まだ車は出ていない。ガレージに行けば間に合う。頼む、詩織」

「……はい」

秋雪の頼みを引き受けた詩織も寿美子の後を追うように、しかし早足でガレージに向かった。

「秋雪よ、やはりお前を彩登美の婿としたのは正しかったな」

そんな無表情の宗継の一言。秋雪は、返す言葉が思いつかず、ただ黙るしかなかった。

「あの猪娘には、お前のように落ち着きのある者が側にいてくれて初めて真価を發揮できる。仕事だけではない。あやつは、誰かに支

えてもらわねば立つこともままならん。これからも彩登美を頼む」

水菱という家柄故に普通の家庭、家族としての選択肢は無い。そんな家族である自分達を理解しつつ、それでも一員となってくれた秋雪に対する宗継の精一杯の優しさと懺悔。それを知っているからこそ秋雪は、この老人こそが自分の目指す人生であると決めた。

水菱グループに入った時から懂れていた存在だが、今自分を認めてくれた。それが秋雪は、たまらなく嬉しかった。

「……旦那様。もったいないお言葉、ありがとうございます。ですが、私は、確かに彼女の言うように父親としての自覚が無いのかもしれない」

妻の残した言葉。確かに、父親なら誰よりも娘を探しに行くのが当然なのだろうが、父親とは、いや、水菱の父親とは、どのように子供に接すればいいのか分からない。

「一般の家庭、一般の父親ならば確かに彩登美の言ったとおりだろうがな。だがお前は、水菱一族の一人。それを忘れるな、秋雪」

「……はい、分かっています」

「うむ。後は、小僧どもが彩葉を見つけてくれれば、万事……」

「イ、イヤアアアアア！」

突然、屋敷中に響き渡る女の悲鳴。

しかも、温い義父と娘婿のやり取りを嘲笑うかのようなタイミングで。

その異様な悲鳴を聞いた食堂にいた茉莉達、居残り組の数人がドアを開け、外の様子を見るが誰もいない。

「今の悲鳴は、詩織か？」

「分らん。だがガレッジの方から聞こえて来たのは間違いない。見に行くぞ、秋雪君」

「分かりました。すまないが湊君と茉莉君、一緒に来てくれ」

「かしこまりました」

「はい」

何があつたかは分からないが、詩織が悲鳴を上げる状況となると

ただ事ではない、と察した茉莉は、二つ返事で了解し、宗明と秋雪の後に着いてガレージを目指した。

中庭を挟み、食堂の対面にあるガレージは、玄関に通じる廊下を通り、その延長線上ともいえる向かい側の廊下を進み、二度ほど左折した突き当たりにあるのだが、茉莉達はその突き当たりにあるガレージの前に到着した時、すでに扉が開かれており、こちらに向かい合うようにへたりこんでいる詩織が見えた。

「詩織？ いったい、今は……」

「ア、ア、アア、アアア」

詩織は、ガタガタと身を震わせ、何かを、いや、茉莉達を指差す。「なんだ？ 我々がどうかしたのか？」

「詩織さん、落ち着いて。何があっただんですか？ それに、彩登美様は……」

駆け寄る茉莉と湊。しかし、扉の直前まで来ると生臭い臭気が鼻を刺した。

「うっ、何、この臭い？」

「詩織さん、大丈夫ですか？ 安心してください、深呼吸を……」

「いや、まずは、ここから引き離そう。こんな臭いが充満した場所で息をしたら、……な、なんだ、これは」

「ヒイツ！？」

「な、何よ、コレ」

「なんだ、壁に何か、ある、の……か」

最後にガレージへ入って来た宗明の背後を見た全員が愕然と両を見開いた。

「に、義兄さん、こ、これは……」

秋雪が指差すガレージ内側のドア、そして周辺の壁を見た宗明の眼には、いったい何の冗談か、尋常ではない大量の血液がぶちまけられ、テラテラと不気味な赤い光沢が反射している。

「これは、血、なのか？」

「……っ、そうだ、彩登美！ 彩登美、どこだ！？ 居るのか！？ 居る

なら返事をしてくれ！！彩登美イイ！！」

だが、返ってくる声は、閉じたガレージをこだました秋雪のエコーのみ。

がつくりと膝をついた秋雪。彼の頬を涙が伝う。

大量の血液を残し、最愛の妻が忽然と消えた。

つまり、それは、

「だ、大丈夫だ、この血が彩登美のだと決まったわけでは……」

「じゃ、じゃあ！この、この血は！？この血は誰の血だというんだ！！これはっ、この血は！！」

「それは……」

関が切れた様に泣き崩れる秋雪。必死に吐き気を抑えようとしている詩織。他の三人は、ただその場にたたずみ、何も言うことが出来なかった。

それでも、いち早く持ち直した宗明が彩登美を探すためと、居残り組全員を動員して本館、別館、倉庫を手分けして探していたところに一二三さん達が彩葉さんを連れて到着したそうだ。

話終えた茉莉は、疲れた様に顔が青白い。たぶん、単なる肉体的な疲れだけではなく精神的にも疲労しているんだろう。

俺達が居ない間に、ずいぶん状況が変わっている。

行方不明となっていた彩葉さんを見つけ出したと思ったら、今度は、母親の彩登美さんが失踪した。しかも、大量の血液を壁に残して。

「……穏やかな話じゃないな。ところで秋雪様は？」

「うん、今は落ち着いて彩葉様の隣の部屋で休んでもらってる。自分も彩登美様を探すって言ってたんだけど私達で押さえ込んだのよ。彩葉様が見つかって少し安心したみたいだけど。……あ、車は玄関の前に止めるようになってさ。警察が来たときのために現場を残しておくべきだろう、って」

そう言えば、警察に連絡が取れないって言ってなかったか？

「電話は、今も通じないんだけど、寿美子さんが最初に連絡したときの電話で警察が来てくれるんじゃないかって宗明様が話してた」「いや、わからないぞ。寿美子婆さんの通報が悪戯電話として処理されていたら来ないだろう。最悪の事態を想定した方がいいだろうな。これは」

雄司さんの予測は、たぶん正しい。

なぜなら山道で彩葉さんと葉路さんを探している最中に一台も車が通らなかったという話も、麓の警察が編成に手間取り遅れているという言い訳がましい俺の仮説よりも自然だ。

だとしたら、直接警察署に出向くしなくなる。だが、

「山道もかなりゆるんでました。今出向きゃあマジでヤバそうですね」

帰ってくる最中に何度かハンドルが抜ける感じがした。そうなりと地滑りの可能性が高くなる。

そんな科学的根拠なんて有るのか無いのか知らんが俺の第六感がレッドゾーンに入った事は間違いない。

車で移動するのはマズイ。そう警報が脳内全体で鳴り響いている。それに、もしかしくとも異常事態。茉莉や朔馬、拓也と弘矩を置いて行くのが言い様もなく不安だ。

「警察は、ひとまずこの雨が止んだら車で行こう。それに、俺らも彩登美さんを探すか」

「……だな。まずは濡れだな」

ぼやく拓也をなだめて車を停車。俺も正直なまた濡れねずみになるのにうんざりしてはいるが皆が動いているのに俺達だけくつろぐわけにもいかないだろう。

ずぶ濡れ覚悟で外に向かおうとした俺、拓也を後ろから朔馬が引き留めた。

「ちよつと待って下さい。外は皆さんに任せて、僕達は本館をもう一度詳しく探しましょう」

「え？」

言っただけで朔馬は、スタスタと本館の中へ。アイツ、けっこう主張するタイプみたいだな。

「俺もその方が良いと思うぞ。ガレージを見ておきたい。今のうちに」

おいおい、雄司さんまでそんなこと言っただけで良いのかよ？どうすっかなあ、なんか急にキナ臭い雰囲気になっちゃった屋敷に女の子とオッサンを放り投げる訳にもいかないだろうしよ。まあ、後で怒られるとすれば雄司さんだろうし？俺に飛び火しない範囲でなら付き合うのもいいか。

拓也も同じ事を考えたんだろう、しょうがない、といった表情で足を玄関方面へ。

「一応、ゲロ袋とか用意しといた方がいいのかな？聞いた限りだと吐いてもおかしくないと思うし」

「ああ、刑事ドラマとかでよくあるアレか。……いらないんじゃない？台所は反対側だし。吐く人は吐くだろ」

「だな。つーか、思いつき警察沙汰の出来事だよな、コレ。拓也の予言が当たっちゃったかな」

「いやいや、あれは冗談だろ？これは、冗談抜きにヤバい話だぞ。ああ、かなりヤバいだろ、コレ」

確かにその通り。少なくとも笑っていられないが、はっきり言ってこんな状況、これまでの人生において経験したことは、無い。当たり前だがな。

つまり、非日常的シチュエーションに俺は、そう、不謹慎だが、少なからず興奮していた。

拓也じゃないが、古風な洋館で巻き起こる連続失踪事件。そんなの、フィクションの中だけの話だと思っていたんだから。

だけど、知らなかった。フィクションじゃ犯行動機がはっきりした犯人が、泣き崩れながら自供するが、現実じゃ犯人動機なんて上等な代物が無くとも人は、人を殺すって。

単に“ そうしたいから ” っただけで殺人を犯すのが人間だということ、俺は、知らなかった。

毒舌家は血のペイントに土下座する？

失踪現場と言われるガレージの扉の前に来たわけだが、正直、俺は自分の部屋に引きこもりたい気持ちで胸が一杯だ。精神的にな。

「なあ、マジで入るの？ここ探す理由が分かんないんだけど？」

だって、血イぶちまけられてる部屋なんて誰が好きこのんで入るかっての。少なくとも俺は、自分から能動的に行こうなんて言い出しはしない。

さつきは、ちょっと面白そうとか思ってたけど、そりゃ、あくまでモブキャラみたいな立場で、事件の被害者になり得ない蚊帳の外にいればこそ面白さなのにな。

「何をいまさら。もう僕達の目の前にガレージがあるんですよ？口だけ番長ですか、嘆かわしい」

アツレ？朔馬さん？なんか毒舌ですね。

「フム、探偵の血が騒ぐのか？見事な推理で解決してほしいな。事件を」

おどけたような雄司さんがドアノブに手を掛けた所で一緒にくっついて来た拓也が口を挟んだ。

「探偵？誰がです？」

ああ、そう言えば拓也は知らなかったんだな。探偵つつうのは、朔馬の事で、なんでも代々続く由緒ある探偵一家なんだとか。

どこの少年漫画だよ。

決め台詞は、“じつ。やんの名に懸けて”ってか？

「僕は、ただ純粹に気になった事を確認しに来ただけですよ。それに、現実の探偵なんて刑事事件に首を突っ込んだりしませんよ。お爺様が特別なだけです」

そう、朔馬の祖父、碓氷ウスイ 朔月さんサクツキという人物は、アメリカで活

躍した探偵で、その筋の人達には、伝説的名探偵なんだとか。にわかには信じられない設定だ。

「えっ？朔馬君って探偵だったの？」

簡っ単に受け入れたな、拓也。その方が気楽に生きていけるのかもしれないが。

「うん。って言ってもただのアルバイトみたいなものだよ。本業は学生だから」

「いやいや、それでもスゴいよ。ってことは、鋭い観察眼と推理力で難解失踪事件を一発解決とか！」

「だから、ちよっと気になった事があったから来たただだよ。失踪事件は、警察に任せればいいと思うよ。今の科学搜索ってすごいから僕の出番は無いだろうし」

それでも、並みの人間よりも自分は、推理力とやらがある、とも受け取れる発言。いや、そんなふうに考えてしまうのは俺がひねくれているからかもしれないな。

「よし、では開けるぞ」

と言って開かれた扉。その先は、数メートル先までしか見えない真っ暗な空間だが、明らかに異質な臭気が閉じ込められていた。

「うっわ。聞いてはいたけどひどい臭いだね」

「蛍光灯、点けてください」

「ああ、点けるぞ。今な」

雄司さんの言葉の後に光が天井から降り注いだ。

「これは……」

思わず口を手のひらで被ってしまうほど大量の血飛沫が扉を中心に塗りつけられていた。これほどの血を抜かれたら、人間は、生きてはいられないんじゃないか？

「……フム、なぜこんな無駄に目を引く犯行現場を残したんだ？犯人は」

「え？拉致しようとした時に抵抗されてつい刺してしまった、とかじゃないんですか？だいたい、俺が犯人ならどこで人を拐ったか、なんて隠しますよ」

拓也の言うように、犯行現場を残す誘拐犯がいるか？

それがこんなに派手な誘拐現場になっているとすれば犯人の予想できなかったイレギュラーによって残すしかなかった、としか言い様がないんじゃないか？

「いや、考えてもみたまえ。人が刺されたでしょう、例えば、腹部を刺されたとして、ここまで派手に血が外に飛び出たりすることはない、これでは、まるで赤いペンキを壁にぶちまけたようだ。しかも、壁を埋め尽くすほど大量にだ。血が一気に出血したにせよ、オーバー過ぎる。いくらなんでもな」

たしかにな。ここまで血を抜くとすれば身体中から絞り出すといっても過言ではないだろう。たとえ頸動脈をかつ切ったとしても横10メートル、高さ3メートルの壁のほぼ全面に血のペイントを施そうってんならいつたいどのくらいの血が必要なんだ？

「朔馬。お前が気になっていた事ってこれのことか？」

と後ろにいるはずの朔馬に向き直ると、彼女は、地面に這いつくばっていた。

「何やってんだ？」

思わず思考で処理することなく思いのまま言葉にしまった。

「何って、見て分からないんですか？」

「いやいやいや、知らねえよ。」

「……土下座、とか？」

「眼科行った方がいいですよ。もしくは脳内科」

えええええっ？あれ？あれ？アツレ？やっぱり、この子、毒舌家ですね！？

山道で素性バレたからってんで素の性格出してきたな？

「この血のペイントが彩登美さんの血液だとすれば、引きずられて拉致、もしくは、殺害されたはず、なんですが……」

「……ああ、そうか、地面に引きずった血痕は無い。彩登美姉さんのものじゃない可能性が高い、ということだな。つまりは」

殺害、ってマジかよ。

じゃあ、これは、失踪事件じゃなくて殺人事件？

「ちょ、ちょっと待て。これが殺人事件だとしてだ。さつき雄司さんが言ったように、犯人、って言わせてもらうが、その犯人は、どうしてこんな目を引く現場を作ったんだ？理由があるのか？」

理由の無い仕掛けは、そもそも仕掛けにすらなり得ない。仕掛けを作るなら何かしらの意図があるはずなんだ。

だが、俺には、その意図がまったく分からない。

「予測で話すならいくらか挙げられます。例えば、この仕掛けにより浮き足立つ居残り組を外に出してこの屋敷の中に新しい仕掛けを作る、とか」

「もしくは、ばらけた居残り組、もしくは合流した搜索組も含めて個別で拉致、または、殺害する。どちらにせよ、この目立つ血のペイントを起点に非日常を演出して判断力を鈍らせるつもりだろうな。犯人は」

聞いてるだけでどちらも背中が寒くなる話だ。

「最終的な目的は、何なんだ？彩登美さんは、無事なのか？」

「さあ、そのどちらの疑問も答えは、分かりません。今の時点では、という話ですが」

まあ、何を調べるにしても判断材料が少なすぎる。

けど、分からない、では、納得出来ない人達が居るのは確かだ。

しかも、こんな派手な仕掛けを施す犯人の目的が単なる拉致、営利誘拐で収まるとは考えづらい。

つつか、これまで起こった出来事、彩葉さん達の事故や彩登美さんの失踪がまったくの無関係だと考えるのは、楽観的過ぎるかもしれない。

だとすれば、すでにこの状況が犯人の描いた図式通りなのか？

犯人の目的が何であれ、一回の犯行で終わらす気がないなら、今一番拉致、もしくは、殺害しやすい人物は誰だ？

「……おい、今、ご当主の近くには、誰がいるのか？」

「寿美子さんは、彩登美さんを探しに行ってます。他の人達も、同様に外、ですね。少なくとも、本館の中には僕達四人とご当主様だ

けどと……」

俺の言わんとすることを悟った朔馬は、行ってみよう、と無言で頷いた。

「拓也、ここを雄司さんと一緒に、もう一度探しといてくれ。俺と朔馬は、宗継さんを見に来る」

「えっ？ そりゃ、構わないけど。ご当主の居場所分かるの？」

たぶん、皆が集合場所としていた大広間か自分の部屋だろう。そこにも居ないとすれば、俺と朔馬で本館を探し回ればいい。

「とにかく頼む！ 何かあったら後で教えてくれ！」

「真人さん！ 早く！」

急かす朔馬の後を追ってガレージを飛び出した。

借金は危険な香りに誘われて

廊下を駆け抜け、階段を飛ぶようにかけ上がる真人と朔馬は、水菱家当主、水菱 宗継の部屋を目指していた。

「なんで食堂にも広間にも居ないんだよ！ジジイ！」

「ハア、ハア、既に拉致監禁された、と考える、べきで、しょうか？ハア」

当主私室は、階段室を登った二階の東棟、廊下の一番奥にある。

二人は、一階にある食堂と広間を探したが、宗継の居た形跡はあれど本人は、煙りのように消え失せていた。

朔馬の言う通り、現在この屋敷は、神隠しとでも呼ぶしかないような失踪事件が発生している。

ならば忽然と消えた宗継も失踪、または拉致されたと連想してしまうのも無理はない。

いや、むしろそうなってしまつて当たり前。

「だいたい、なんでこんなだつ広い廊下を作つたんだよ！」

「セレブのステータスか何かでしょう？……つと、ここが宗継様のお部屋ですね」

眼前に荘厳な装飾を施された扉が固く閉ざされているのが見えた。おいおい、これだけでウン十万しそうな代物だ。

くたばつちまえ、セレブリティ。

いや、くたばられたらバイト代出ないから振り込み終わったらキエロ。

「なにか、暗黒面的思考をしますか？」

「いや、そんなことはない。宗継様、おられますか？」
反応無し。

まさか、マジで消えてる？

「……おい、どうする？宗継様、消えてんじゃねえか？」

嫌な予感がビリビリして思わず朔馬にこれからの行動を聞いてし

まう。

我ながら情けない。

これって、噂に聞く“第一発見者”ってやつでは？

「まだ決まったわけじゃないでしょう？」

おい、ついさっき拉致監禁うんぬん言っただけか？

「しょうがない、真人さん、扉を破って下さい」

「……おい、この高級感吐き出しまくり、自己主張しまくりの御扉さまをか？」

「大丈夫でしょう。年代的な特長で考えれば、明治初期の作品でしょうから、高くて数十万円です」

「俺的には、全然大丈夫じゃねえよ！！」

そんな単価の物品、壊せるわけねえだろ！

「怒らないでくださいよ。二重の意味で懐の小さい人ですね」

コ・ノ・ヤ・ロ・ウ！！

「でも、そうすると、どうします？皆さんが戻ってくるまで放置しますか？」

家族の了承を得てから破る、ということか？

どっちにしても荒っぽい作業だよな。早いか遅いかの話ならば、早い方がよいな、何があったとしても。

「一応、聞いておくが、ここの鍵のマスターキーって誰が？」

「ご当主様ですよ。ちなみにスペアキーはありません。よほど自分の部屋を他人に見られたくないようで」

偏屈ジジめスペアキー作ってないから壊すはめになるんだぞ。

「これでジジイが生きてたら笑えない話だな」

「バイト代が出ても扉の弁償代に消えるだけでしょうね」

「……なあ、朔馬。お前も何割か負担しろ」

「いやですよ。あくまで扉を壊したのは真人さんで僕はただ傍観していた、ということヨロシク。やあ、その年齢で借金とは、楽しい人生になりそうですね？」

と楽しそうに嘲笑う朔馬は、この上なく機嫌が良い。

こいつ、毒舌かと思ったが、どうやら腹黒だったようだな。しかも、他人の精神を攻め、じわりじわりと弄ぶ類いに悦を見い出すドSだ。

ねっとりとした脂汗が額に滲み出し、これから支払うことになるかもしれない借金の返済計画を組み立てはじめる俺の思考。

……考えるまでもない。誰か、今すぐこの役を交換してくれ。頼むから。

「……もう、たかだか数十万の借金程度でビビる必要がありますか？
じゃあお前がやれ。」

「はあ、かわいそうだから教えときましょう。水菱一族にとってその程度の扉なんていくらでも替えがきますよ。だから弁償代なんて請求されることもないでしょうから安心して蹴破ってください」
仕方ない、と言うようにやれやれ顔で朔馬が種明かし。

「……本当か？」

と涙目でボヤける視界の朔馬の顔を見たら、

「ええ。僕が水菱一族ばりにセレブなら扉一枚にいちいち目くじら立てませんよ」

だから、さあ。とニッコリ微笑みながら扉を指差し促す朔馬。
そうか、分かったとおもいつきりヤクザキックを繰り出した俺。

バカァン！！

思いの外いい音で開いた扉の中、水菱家当主の部屋は、ミステリ
ー小説の例に漏れず真っ暗だ。

「あゝあ、やっちゃった」

「えっ？」

「弁償代の事です、あれは、僕が水菱一族の人間だったら、というだけのもの、の話です。本当に一族の方々が請求しないかどうかなんて、僕には分かりません」

は、嵌めやがった！こいつ、俺を嵌めやがったぞ！！

「ハハハ、引つ掛かる方が悪いんですよ」

「……お前、絶対友達少ないだろ」

腹は立つが、やっちゃったことをブーブー言ってもしょうがない、と部屋に入った俺は、とりあえず蛍光灯のスイッチを探すために壁に沿って移動。

電気が点いてないところを見ると元からここにもジジイは居なかった、と言うことが。マジで借金しちまったらキツツイなあ、オイ。あ、スイッチ見つけ。ポチっと。

「電気点けたぞ」

蛍光灯は、何度か明滅を繰り返して安定するまで数秒。

だがスイッチを入れて一度深呼吸してすぐに異変を感じた。

言うなれば、酸素が濃い。いや、何かねっとり濃厚な臭気が俺の肺に侵入しようとし、無意識に俺の本能が拒絶している。

“何か”の侵入を完全に防ぐことは出来ず、“何か”が肺に到達。肺から俺の血中に含まれた酸素と同化し、速達で届けられた“何か”を脳が判定した。

その判定を理性が否定するも本能が肯定する。

信じたくない事象に遭遇した時の人間が、どんな事をかんがえるのか、俺は、身をもって体験する。即ち、否定と肯定を脳内で繰り返し、他の思考がフリーズしてしまうってことだ。

……おれは、コレをしっている。

蛍光灯が部屋を照らす。

ヤバイ、とてつもなく。

俺の人生で一度も見たこと無い、見たくもないソレが視界に入ってしまう。

既に吐き気は喉の奥底まで登ってきている。ソレを見たら確実に吐く。吐いてしまう。

「い、ご当主様？」

俺と朔馬に背中を見せ、膝をつき、磔にされたように手の甲を壁に釘で縫い付けられている水菱家当主、水菱 宗継。

最高級の絨毯は、三日前までは深緑色一色だったはずだが、今、蛍光灯の光に照らし出されている色は、茶色に近い赤色が混じったまだら色。俺は、それに似た色をつい数分前に目にしている。

そう、ガレージの壁にぶちまけられた赤に似ている、いや、おそらく、同じ塗料だろう、つまりは、血液という塗料だ。

「……うそ、だろ？こんな」

極めつけに鋸で切断された^{ノコギリ}としたか思えない断面から後頭部から、神経が飛び出している。

そして、生きている人間なら絶対に必要なはずの、そこに収納されているはずの、脳ミソの部分は、空洞。

白と赤と黄色の三つの色が混沌と混ぜられた穴としか言い様が無い。

「……なんだ、これ。なんなんだよ！コレエー！」

「お、落ち着いてください、真人さん。ショックなのは分かりますが、落ち着いてください」

落ち着け？落ち着けだと？無理だろ！？こんなの見せられていつも通りでいるって？不可能だ！！なあ、これは、冗談だろ？本当に人が、しかも脳ミソを盗られて死んでるなんて！！

「ア、アア、アアアア！！」

何か言葉を出そうにも口が強ばり、舌が痙攣し、ろくな言葉が出てこない。

「真人さん、しっかりしてください！大丈夫です！すぐにここを出ましょう！ほら、立って。立ってください」

そう言われてようやく気づいた。俺は、知らないうちにしりもちをついていたことに。

「さあ、出口の方へ」

俺の襟を引っ張って扉の外に出た朔馬は、ハア、と深呼吸。

「これで決定的ですね」

「……何が、だよ？」

一時の錯乱状態から脱した俺は、壁に背中を預け、息を整えながらなんとか言葉を紡ぐ。

「今現在、この屋敷の中では殺人事件が起こっている、ということが。彩登美さんの失踪も関連していると考えた方が良さそうですね」
下の階からは、雨に濡れたであろう、水菱一族と弘矩達が屋敷に入ってくる音が聞こえた。

ジジイのこと、何て言えばいいんだよ。

「……報告、しないわけにはいかない、よな」

「真人さんは、少し休んでいてください。僕が皆さんに報告しますから」

こちらを気遣う朔馬の心はありがたいが、俺、基本的に負けず嫌いなんだよ。

一度四肢の動作を確認して異常無しと判断。なら、部屋に引込んで布団の中に潜り込むのはまだ早い。

「大丈夫だ。俺も行く」

空元気？根性？気合い？どれも違う。心配してくれるのはありがたいが、カッコ悪いだろ？

ああ、そうとも、やせ我慢だとも。文句があるか？無いなら足を動かせ、血を巡らせろ、みっともなく錯乱した自分を反省しろ。

そうとも、俺は、神栖の忌児、神栖 真人だろうが。

よっしゃ、元気出てきた。

「本当に大丈夫なんですか？」

「問題ない。さあ、気が滅入るが、下の階に降りよう。話さなけりやならないことがたくさんある」

そう言っ二人でもと来た廊下を重い足取りで戻ることにした。

殺人容疑者・神栖 真人、碓氷 朔馬

「そんな、父上……」

二階、水菱家“先代”当主、水菱 宗継の私室に入った息子、娘達は、各々この現実をどう受け止めるべきか、これからどうするべきなのかと迷う表情で父親の無惨な亡骸を目にしていた。

「そんな、いったい、誰がこんな酷い事を。何で父様がこんな目に……」

後退り、吐き気を懸命に堪えようとするのは二女、万彩。

その肩をそつと抱く夫の理一郎も宗継を直視することが出来ず目を固く瞑る。

「私達のご当主様を見つけた時には、既にこの状況で」

唯一、淡々と状況説明を続ける朔馬が先程の捕捉とばかりに俺と自分の無実さを付け加える。

だが、そんな説明を遺族が聞いているわけもなく、

「いったい、誰がこんな事をしただど!? 碓氷君、神栖君!! 君達がこの本館に入るまで、私達は外と別館を二人一組、三人一組で彩登美を探していたんだ! 君達以外に誰か犯行が可能な者がいるのか!?!」

充血した瞳で睨み付ける長男、宗明が俺と朔馬が犯人に決まっていると言うようにまくしたてる。

おい、ちよつと待て。そんな訳あるか。何で俺がジジイをここまですで無惨にバラさなきゃならないんだよ?

「ちよ、そんな訳無いでしょ? 私も朔馬もガレージを探して、その直後にご当主様を探しに行っただです。こう言っちゃなんですが、人一人を磔にして頭蓋骨から脳ミソくり貫く時間なんて無かったですよ!」

「……確かに、私達が犯人だと仮定するなら犯行は時間的に不可能です。それに、もし、私達が犯人だとしても、返り血ひとつないこ

の服は？犯行に使用した凶器は？犯行動機は？どうしてわざわざ自分達の犯行を自ら口にして皆様をこの部屋に連れて来る必要があるのですか？以上のことから私達が犯人だとおっしゃりたいなら適切な証拠を提示してください」

ガトリング砲みたいな朔馬の返しに何一つ答えを提示出来ない宗明は、苦虫を噛み潰したように渋い顔を続けるだけだった。が、おそらく、これは、必ずこの屈辱は晴らして見せるぞと決意を固めたようにも受け取れる。

「そうだが、宗明兄貴。朔馬君と真人君が犯人だと言う証拠も無しに犯人だと決めつけるなよ。失礼だろ」

助け船を出してくれた雄司さん。

「うるさい！貴様は黙っている！」

どうにも宗明さんは雄司さんのことが嫌いな様で彼が話しかけるととたんに機嫌が悪くなる。

そりや、この屋敷に到着した時に“遺産を独り占めしている”と言われりや良い感情を持つのは難しいだろうが、どうにもそれだけじゃなさそうな気がする。

「兄さん、とりあえず落ち着いてください。とにかく、我々の中に犯人がいる、と言った類いの話をしてもしたかありません。使用人や子供達のいる一階の広間に戻りましょう」

比較的落ち着いている理一郎さんがそう促すと反論する者なく従ったが、宗明さんは、いまだに俺と朔馬に悪意剥き出しな視線を送っている。

だから俺達は犯人じゃないつつのに。

「何やら熱い視線を感じますね」

朔馬が俺だけに聞こえる音量の声で話しかけてきた。

「熱がこもっていたら何でも良いってわけじゃないだろ、この場合」「そうですね。どうやら僕達は、第一容疑者になってしまったようですよ？どうしましょ」

どうしましょ、って、こいつ、何でこんなに余裕な顔していられ

るんだよ？

「あのさ、なんか無いのか？こうゆう状況を打開する方法」

「さあ？なんなら真人さんが警察が到着する前に事件の真相を解明して疑いを晴らす、というのは？」

「自分で言うのもなんだが俺は、人並みの頭しか持ってない。ベーカー・ストリートの名探偵でも安楽椅子に座って事件の顛末を語る老人でもない」

「いやいや、そうでもないと思いますよ？次に誰が狙われるか、と考える中させたんですから」

まったくもって嬉しくない。しかも、その中のおかげで犯人扱いを受けているんだから目も当てられない。

「そんなに不機嫌そうな顔しないでくださいよ。扉のこと、皆さん気にもしていないようで代金請求されなかつたでしょ？」

「その代わりに犯人扱いだ。高かつたのか安かつたのか微妙だぞ」

ああ、何でこんなに気苦労が絶えないんだ、俺？いったいどんな星の下に生まれたつつうんだ。

同じく犯人扱いを受けた朔馬は、何事もなかったように平然とした面をしているし。

どうゆう神経してるんだ、コイツ？

いやしかし、警察の対応がまったく分からない。寿美子さんが連絡入れてからもう一時間は余裕で経過しているのにサイレンの一つも聴こえない。

この雨と風でヘリは飛ばせないにしても道路は使えるんじゃないのか？

とにかく、この屋敷は、今現在携帯電話も固定電話も使えず外部と連絡が寸断された状況に陥っているのは確実。

つまりは、陸の孤島と言うわけだ。

やれやれ、異常殺人嗜好癖の人間が近くにいるとすれば、誰か、さっさとどうにかしてくれ。

精神衛生上、俺みたいな健常者がいていい場所じゃない。

「とりあえず飯食おう。何か良いアイデアが浮かぶかもしれないし」

「さっきリバースしかけてよくそんな台詞が出ますね。普通は食べ物なんて受け付けませんよ」

据わった目で見てくる朔馬だが、腹減るのは人間として普通な事を知らない人間なんだろう。

「俺は、普通だ。それこそ、平均値が服着て歩く程の、な」

「ハイハイ、そうですね。でも知ってます？普通の人間だったら、こんな状況でそこまで冷静になってませんよ」

「顔に出にくいんだよ。失礼だな」

「そうですね。でもさっきは可愛かったですよ？」

さっきって、いつの話だ？

「ご当主様の遺体を見つけた時の驚きっぷりが。ククク」

……絶対、俺よりもお前の方がヘンだろ。

アリバイ検証会議

真人と朔馬が水菱家の次期後継者候補たる宗継の子供達と一緒に戻つてくると残つていた面々が一斉に彼らの方に視線を向けた。

「宗明様、ご当主様は……」

心配そうに手を胸の前で組みながら宗明に聞いたが真人達の雰囲気から彼が既に手遅れだったことを察したようだ。

それぞれがそれぞれに落胆の仕草で椅子に座り込んだ。

「マサ、ご当主様、やっぱり？」

茉莉も若干顔が青くなっているが、まだいつもの気丈さは失われていないようだ。

「ああ、おかげで俺と朔馬は容疑者になっちまった」

茉莉にだけ聞こえる音量で答えると息を飲んで一步引かれた。

「うそ、マサが？」

「殺つてない。理由もなけりや理屈も無い」

ハア、と止めていた息を吐き出し、安堵の表情で俺の顔を見返す。

「もう、くだらない冗談言つてる場合！？人が死んでるんだよ？」

「全部が冗談ではないんですよ。宗明様は、僕達がご当主様を殺害したと疑っているんです」

ひょっこりと横から顔を出した朔馬によつて俺は、見逃したい現実に戻る事を余儀なくされた。ああ、ホント、知らないうちに厄介事に巻き込まれるなんて！

内心で頭を抱えて悶えていると背中を叩かれて肩を捕まれた。

誰に？弘矩か拓也しかないだろう。

「いやいや、やっぱりお前って面白いな。知らないうちに厄介事を中心にいつちまってるよ。ハハハ」

じゃあ、代わってくれよ、拓也。そしてなんだ？弘矩の可哀想なモノを見るようで沸き立つ笑いを堪えきれず顔を下半分隠しているその面は。

「いや、どうだ？殺人犯呼ばわりされた気分は？」

「ああ、楽しかったよ。渋いおっさんから熱烈なアイコンタクトを受け続ける視姦プレイだ」

投げやりに返して広間の方を見ると一二三さんが宗明さんに耳打ちしている。

こちらの視線に気づいたのか早々に二人してうなずいて宗明さんがおもむろに立ち上がった。

「皆、とにかく状況を整理しよう。警察が来たとき、お互いの発言が不利に働かないように」

「……ええ、そうね。もう、昔みたいになることがないように」
万彩さんも同意し、彩登美さんが失踪した時間からの行動を確認していくことになった。

だが、その前に言っておかなければならないことがある。

「……あの、その前にご報告しておくことがあります」

そう、ガレージで見つけた血のペイントの不可解な点を。

「なんだ？簡潔に述べろ」

「はい、私と朔馬、雄司様と拓也がこの屋敷に戻ってきた後、我々は、一旦ガレージを見て回りました。そこで気づいたのですが、あの壁についた血液は、誰のものなのでしょう？」

「彩登美の血以外に誰の血だと言うんだ！私達は、父と彩登美を失ったのだぞ！無神経な発言はやめろ！！」

顔を真っ赤にした宗明。

たしかに無神経だということは理解しているが、こっちは謂われもない殺人容疑で疑われているんだ、多少強引にでも無実の証拠になるものは提示させてもらうさ。

「失礼いたしました。しかし、あの血液は、彩登美様の血ではない可能性が高いと思います」

「……それは、本当かい？」

先程山道で助け出した娘の彩葉の看病を一時切り上げ家族会議に出席した秋雪が失踪した妻、彩登美の生存があり得るといふ真人の

言葉にわずかな希望を見いだしたように顔を上げた。

「はい。少なくとも彩登美様は一階のガレージで殺害、もしくは暴行を受けた、ということは無いと言えます」

だが、今になって思えば誰の血液か分からないが壁を塗り潰す程の量だ。抜き取られた、もしくは切り裂かれたにしても尋常じゃないのは明らか。

…… いったい、誰の血なんだ？

「そうか、彩登美は、まだ生きているかもしれないんだな……」

呟いた秋雪は、台詞とは正反対に沈痛。

それもそうだ。彼の妻は、いまだに誘拐殺人犯に拉致されている事が確実となっただけで事態は、まったく変わっていないのだ。

「ちよつといいかしら？ 真人君の言っている通りだとして、犯人の要求は何？」

そう、人間を拉致するならば普通何かしらのアクションがあるはずなのだが、彩登美さんを拉致した犯人は、まったくそんなそぶりも見せない。

少なくとも日本有数の富豪、水菱の人間を拉致したのだ。ならば、身代金の要求があつてしかるべき、だと思ふのだが。

「拐った理由は、身代金ではない、と？」

いまいち話の流れを理解していない拓也が確認するように質問するが、あいにく、その答えを知っているのは犯人だけだ。

「つてゆうか、天下の水菱、その後継者候補を拉致つたとすれば身代金要求が普通でしょ？ それ以外に理由があるんですか？」

「それは……」

弘矩の一言に息子娘達が言を濁した。

つまり、ある、ということか。

「…… 差し出がましいことを承知で質問します。以前、この屋敷で曰く付きの事件があつた、という噂を小耳にはさんだ事があるんですが、それと何か関係が？」

ここに來て茉莉や雄司さんが声を潜めて呟いてる過去の出来事、

それが何か知らないが、ろくなことでもないのは明らか。なら、それで被害を被った誰かの報復行為と考える事は出来ないだろうか？

「……兄さん。まさか、彼女が生きているんじゃない？」

「バカな。あれから何年経っている。警察も打ち切った事件だ。戸籍上でも、……いや、やはり関係無いだろう。とにかく、今この屋敷の回りには正体不明の殺人犯が潜んでいる事は確かだ。各自十分に警戒して行動してくれ」

濁した言葉を隠す宗明も自分に言い聞かせるように注意を皆に促し、状況の整理が始まった。

「まず、彩登美叔母様と秋雪叔父様がこの屋敷に到着したのが午後六時を少し回った頃、よね？」

事の発端、彩葉と葉路の行方不明の報を知らせた頃の全員の行動を確認することから始めようと美乃里が口を開いた。

「ああ、その頃だ。詩織、君は覚えているか？」

「はい。正確には午後六時七分でした」

「ふむ、それで我々は……」

宗明は、分かりきっていることだが、と後付けのように言葉の続きを使用者の一二三に視線をやる。

「到着されていたご家族の方々は、食堂でお茶を。私ども専属使用人と真人君達も食堂の隣にあるキッチンで夕食の用意をしております」

だな。あの頃も雨は降っていたが豪雨というレベルでもなかった。「報せを聞いて山道の搜索に出たのが三十分過ぎ。屋敷寄りの搜索は、理一郎様、太刀音さん、あと俺です」

と弘矩の報告。

「中間地点は、私と拓也君、の二人で搜索を。可能な限り探しましたが葉路君の足取りは……」

一二三さんと拓也の二人が探した方面、つまりは中間だが、森の幅が狭く、足元が脆い危険区画だ。葉路さんが足を滑らせ谷に落ちたとすればその可能性が高い。

「山道入口は、私と朔馬、雄司さんが担当しました。もうご存じの通り、彩葉様と樹木に追突した車があるので他の手がかりは何も」最後に俺が搜索班側の報告とし、後は居残り組。

「こちら、父を含めて全員が食堂に居たが、彩登美が彩葉を探しに行くと言って飛び出し、後から詩織が追って、ガレージの惨状を見つけた、と言うわけだ」

この一連の流れが約7時半頃まで。その後に居残り組が屋敷の外に出て彩登美さんの搜索を開始。数分後、それに彩葉さんを乗せて戻ってきた一二三さんと理一郎さん、弘矩達が合流する。

ご当主、宗継が殺害されたのはおそらくこの時間帯。

本館に一人になったのを見計らったの犯行だろうことは俺にも分かる。

その三十分後に俺達、残りの搜索班が屋敷に戻る。

ガレージで不審点を見つけて宗継を探しに行ったのが十分後、八時十分頃。

この間ジジイが一人になっていたのは四十分程度。礫にされて脳ミソくり貫かれるには十分だろう。いや、人間の骨がどの程度の時間で切断されるのかなんて知りもしないがノコギリとか使えば可能だということは言わずもがな、ということだが。

……しかし、外部の人間の犯行にしては手際が良すぎないか？

俺達、期間従業員が迷うほど広いこの屋敷で、ドンピシャでジジイの居場所を当て、速攻で押し倒して自由を奪う。

どう見てもこの屋敷に初めて来た人間ではないだろう。

しかも、ジジイの部屋は、荒らされた形跡が無かった。

つまり、ジジイが警戒を解く相手だった？

「そういえば、なんでお祖父様が危ないって分かったの、真人君？」美乃里の声が若干真剣味を増して静寂を打ち破る。

え？やっぱり俺って最重要人物？

「そりゃ、まあ、あれだけ彩登美様を手の込んだ方法で誘拐した犯人だとしたら一回の犯行で終わらせるのか、と」

「ふう、ん。それにしてもタイミングが良すぎるんじゃない？私としては貴方、かなり怪しいわよ、ね」

たしかにそうだけど、本当に偶然の発見したものだからな。本当にそれだけなんだが、俺が殺した証拠も殺していない証拠も無いわけだから、端から見れば黒に近いグレー。

このままじゃマジで殺人犯に仕立てられちまうぞ。

「……先程真人君が言っていましたけど、人体の骨格を切断するには電動ノコギリでもない限り相応の時間と手間が掛かります。僕と真人君がご当主様の部屋に入り、全ての作業を完了させるには時間が足らなすぎます。それに、彼は、ご当主様を殺害していません。共に行動していた私が保証します」

「あら、でもあなたが彼の協力者、つまりは共犯者だとすればその保証は消えてしまうわね？」

「そんなこと言い出したらこの屋敷内に居る人間全てのアリバイが不成立となりますね」

堂々巡りだと朔馬も美乃里も瞑目してそれ以上の言葉は不要とお互いが悟ったようだ。

犯人の思惑ってやつがあるとすれば俺達の中に不和を招くことなのか？

それは無いか。こんな状況だ、誰でも疑心暗鬼になって当たり前、なのかもしれない。

ボーン、ボーン。

ちょうど九時を報せる大時計の音が広間に響いた時、宗明が手を打ち皆の視線を再び自分に向けさせた。

「今は犯人探しをしている場合ではない。今日はもう皆部屋に戻ろう。一応、使用人は交代で一晩、誰かが必ず起きておいてくれ。必ず部屋の鍵を閉めるようにな。ああ、そうだ、真人君。君は必ず誰かの目の届く場所にいてくれ。次に何かあった時、疑わなくて済むからな」

まだ俺の嫌疑は晴れてないのかよ、と内心突っ込むがそれでいい

なら言いなりになってやるよと開き直って広間での面白くもない会議を後にした。

助けて下さい、探偵様

今時セレブが本館に泊まり、使用人が別館に泊まるなんてどんな差別だ、と普段なら言うところだが、この別館、さすがは水菱、と呼べるくらいに豪華だ。

一階にはビリヤード台とダーツの的が数台用意され、カウンターバーが横に設置され、俺なんか飲んだことも聞いたことも無い銘柄の洋酒日本酒が棚の中に並んでいて三日前から弘矩と拓也と俺の三人が朝まで占拠し、たまに茉莉や朔馬が飲みに来たりもして楽しい飲み屋と化していたが、今は重苦しい空気で充滿していて、とてもじゃないが酒を飲もうという奴は、一人もいない。

「……さて、寿美子さんは、寝室に行つたのか？」

当主付きの使用人である寿美子さんを抜けば最年長の一二三さんが仕切るような口調で言つた。

「ええ、ご当主様のことのショックが大きいです。なんと言つても、ご当主様に古くから仕えている方ですから」

コーヒーを持ってきて皆に配る太刀音さんが一二三さんにコーヒーを手渡しながら返してソファーに腰を下ろす。

「そうだな。詩織君、君も無理する事は無い。彩葉様や彩登美様の件で気を張りっぱなしだったんだろ？」

「……そう、ですか？じゃあ、このコーヒーをいただいたら少し眠らせていただきますね」

力無げに微笑む詩織さん。

そりやそうだろう、一日で仕えている家族の二人が行方不明になつているんだ、気疲れもするだろう。

「ところで、俺のこの状態は？」

緊迫の上流階級、華麗なる一族チックなシチュエーションに水を差して申し訳ないが、俺の格好がどうにも浮いている。

ベストにスラックス、純白のワイシャツまでは先程と変わらない

が、腕を後ろに回され黒い光沢がかつこいい金属製のアクセサリーで両手が拘束され、しまいには、そのアクセサリーから鎖が伸びて柱に固定されてしまった。

俺にこんな奇特定の性癖ありもしないつつの。

ちなみに、黒い光沢のアクセサリーってのは、婉曲に表現しただけで直接的に言えば手錠だ。

特殊なプレイだ。放置プレイと視姦プレイの中間くらいで羞恥心が際限無しに込み上げてくる。

例のごとく弘矩と拓也がうつむきながら肩を痙攣させて笑ってやる。

覚えてろよ、オマエら。

「不自由を掛けて申し訳ないが宗明様からの言い付けでね。警察が到着するまで君から目を離すな、と」

あの、クソオヤジがああ！！

「いや、俺、ホンツトウに無実ですって！何もやってないのにこの仕打ちですか！？」

「……あまり大きな声を出さないでくれ、我々も本気で君を疑っているわけではないよ。これは君のためでもあるのだよ。例えば今後何かしらの事件が起こった場合、君に疑いの目が向くことはない。何せ四六時中我々の内の誰かが君を見ていたのだからね」

一二三さんが、まあまあと両手で落ち着けとジェスチャーして不意に真面目な顔で俺の目を覗いた。

「実際、ご当主様の殺人、彩葉様と葉路君の事故も君が犯人だとは思っていないさ。アリバイも君の友人達が証明しているし、何より犯行動機が不明確だしね。ただ、我々の雇用主は疑り深い性分を生まれながら持っているような方々だからね。ついでに私の雇用主は小心者なのさ。少しでも自分を脅かす存在は全力で排除したがる。頭も足りていないようだしね」

明らかな陰口。普段なら聴いても面白くない部類の話だが、今は、自分の無実を知っていてくれる人がいると解釈して聞き流す事にし

よう。

「だいたい、一連の事件の犯人、というのな葉路君が怪しいがね」
「彼なら谷に落ちたら死んでいるのでは？」

「太刀音君、君は怖いことを平然と口にするんだね。いや、それは置いておく。簡単な話、我々は彩葉様を見つけた後、彼が谷に落ちたと結論したが証拠はどこにある？誰か彼が谷に落ちた場面を見ていたのか？山道を探したのはたったの八人。死角は数多く、森のなかに隠れていたなら見つからないだろう」

たしかに、未だ行方不明の葉路さんを犯人に仕立て上げれば 彩葉さんの事故は説明つくし、ご当主殺害についても屋敷に潜入して隠れていれば犯行可能。

宗明のオッサンが俺を犯人だと言い続ける根拠は、他に犯行可能な人間が居ないから。

だが、葉路さんが生きていたら？

今一二三さんが言ったように殺害はできる、が、あの密室が理解不能だ。わざわざ鍵を閉める理由が分からない。

何かしらの意図があるのか？いや、だが鍵は、ご当主しか持つていなかった。つまり、外から鍵を掛けることは不可能。誰も入れない部屋で誰かに殺されたとは思えない死体。

矛盾している。

「あの、屋敷の本館には隠し通路みたいなものがあつたりしますか？」

当主私室に入るためには一つだけのドアをくぐるしかない。他に方法があるとすれば隠し通路という裏技くらい、と踏んだのだが、
「いや、私は二十年以上お仕えしていますがそのような通路、聞いたことも無いよ」

と一二三さんの一言で潰された。

この密室殺人のトリックを解かない限り俺以外の誰もが犯行は不可能。

何故俺だけが犯行可能なのか？

鍵の掛かったドアをぶち破ったのが俺。見ていたのは朔馬だけ、つまり口裏合わせているんだろ、って言われりゃいくら俺が密室だったと主張しても誰も聞いてはくれず、当主私室が密室だったことを認めないだろう。少なくとも警察が到着し、現場検証が終わるまでは。

「なあ、朔馬」

「なんです？その切なそうな顔は？」

「いや、そうかもしれないけど、察してくれ。……なんとかなんないか、このままじゃ俺が実行犯でお前が共犯者だぞ」

「アタシからもお願い、朔馬。こいつ、バカでスケベでどうしようもない穀潰しだけど簡単に犯罪者になる奴じゃないよ」

茉莉、お前は俺を弁護してるのかけなしているのか、どっちだ？言ってることを否定はしないが。

「うーん、笑えるのは笑えるがこのまま真人がブタ箱行きになつたら笑えないからな、俺からも頼むよ、朔馬。笑いの種がなくなつまう」

「そうだな、俺も一緒にコミケ行く友達が一人少なくなるのが寂しいし、助けてやってよ、朔馬」

弘矩、拓也、お前らはホントに素直だな、自分らの都合で俺を助けると言っなんてよ。

「……ふう、仕方ないですね。茉莉に泣かれても困りますし、あなたに少し興味が湧きましたし。ここで誤認逮捕されてもつまりませんから、少し力になりましょう。あなたの無実を証明するために」

こうして、俺の無実を証明するため、本気かどうか分からんが、伝説の探偵の孫が水菱屋敷殺人事件の捜査に乗り出した。

ちなみに、朔馬の“興味が湧いた”発言により拓也がヤオイネタを思い付いて弘矩と熱く語りだした内容は言わないでおこう、心に傷が残る。

そつえば、コイツら、朔馬が女だって知らなかったよな。

別館の謎解き人

「まず言っておくことがあります」

目を閉じた朔馬が皆に言い聞かせるように口を開いた。

「今回の殺人事件、及び彩葉様の事故に関して、僕や真人君は清廉潔白の白です」

何故なら、と続ける。

「犯行動機と言ったような曖昧な要素を根拠にするわけじゃありません。アリバイや証拠を根拠に疑いを晴らしましょう。それが一番手っ取り早い方法でしょう」

と、今まで座っていたソファから立ち上がりダーツの結果を書き込むためにあるのだろうホワイトボードを引っ張り出し皆が見やすい位置に固定した。

「簡潔にまとめましょう。僕と真人君が拓也さんと雄司様と一緒にガレージに向かった時間に時計をスタートとしてご当主の私室に到着したのが五分後、といったところです。この点は雄司様が保証してくれるでしょう。で、さらにご当主様の遺体を発見し皆さんに報告したのがそこからプラス五分前後、つまり僕と真人君の空白の間は十分程。」

宗明様はこの十分の間に犯行が行われた、とおっしゃっておられますが、それは不可能です」

つらつらと述べた現場の様子をホワイトボードに書き連ねていく朔馬。

慣れているのだろうか？

そこで質問、とても言うように太刀音さんが手を上げた。

「それは、何故です？ご当主様は、頭蓋骨を頭頂部から後頭部までを切断されていた、と聞きました。刃物では無理でしょうがノコギリ、もしくは小型のチェーンソーだったらどうです？チェーンソーの音も外にいた我々には雨音で掻き消されて聴こえないでしょうか

ら」

「ええ、でしょうね。でも、その殺害方法には致命的な欠陥があります」

太刀音さんの言葉を正面から受け止め、なお朔馬は、自信に満ちた瞳が輝かせた。

「僕達二人が犯人だとすれば返り血を浴びた衣服はどこに？凶器についてと同様です。弁護するなら、ご当主様を殺害し、次に衣服を整え皆さんのいる食堂に行くには少々時間が足りません。そして凶器ですがノコギリかチェーンソーを使用したならばその凶器は今どこに？そして仮にその凶器が見つかったとして、それが僕と真人君が使用したと言う証拠は？あやふやな状況証拠だけで僕達を犯人だと言うのなら警察が来た時にはつきり分かるでしょうね、僕達は真つ白だと。その時の謝罪はどなたからいただけるんでしょうね？」

そうホワイトボードから振り向きざまに啖呵を切った朔馬は、どのような疑問に対しても受けて立つと言わんばかり。

「疑わしきは罰せず、と言う言葉もあります。まあ、僕達は外界と連絡のとれない密閉空間に閉じ込められた者どうしなんですから、仲良くいきましようよ」

最後の最後に自分達の置かれた状況にかこつけて僕達が一つの共同体なのだと言って無駄な争いを止めないと真犯人の思う壺だと副音声に含ませる朔馬は、間違いなく話題を俺達犯人説から一致団結しようと言う流れに転換させた。こいつ、弘矩並みに人を動かすの上手いな。

「たしかに、君達が犯人である可能性は今のところグレーだ。そして朔馬君の言うように内部で争っていたらそれこそ足をすくわれかねない。今後は、明確な証拠も無しに誰彼を犯人だと叫ぶのは無しにしよう。少なくとも我々だけでも」

と一二三さんが締めて他の面々が頷いた。

「あーっと、一二三さん、俺と朔馬の疑いが晴れたついでにこの手錠も解いてくれませんか？」

皆忘れてるようだが俺は手錠という素敵アイテムで束縛されているのだ。女王様でも呼ぶのか？そして俺にそっちの趣味は無いことを宣言しておく。

誤解ないように。いや、ホント。

「申し訳ないが、君の手錠の鍵は持っていないんだ」

はいはい、口上はわかってるよ、でも俺の疑いなら晴れ、……え？なんつった？

「鍵は宗明様が持っている。我々が君に懐柔されても鍵をはずせないように、とね」

残念だ、とでも言うように両肩を下げる一二三。

どこまでねちっこいんだよ、そこまで俺が犯人だと確信する根拠は何？

軽く三ダースほど罵詈雑言を脳内で再生し終え、理性を取り戻した俺の眼前に立つ一二三さん達常勤の使用人の人達が仕方なさそうに俺を見ていた。

「ご不快に御不快に思われるのは当然のことでしょうが、宗明様の用心深さは今に始まったことではありませんのでご容赦ください」
目を伏せ淡々と喋る詩織さん。なんかこの人と喋るのは始めてだな。

「……そつすか。んじゃ、代わりつてわけではないですが皆さんに聞きたいことがあるんですけど、いいつすか？」

マグマのようにハラワタ煮えくりかえっているが、昼時から気になっているキナ臭い話、数年前に起こったという事件を代償ついでに聞いてもバチは当たらないだろう。何せ、こっちは人間にとって一番大事な自由ってやつを差し出してるんだからな。

「ああ、我々で答えられることなら、なんなりと」

「……雄司さんや茉莉がちよいと口にしたことなんですがね、何年か前に、この屋敷で起きたという事件とやらを話してくれますか？」

「……ふむ、茉莉君は、知っているのかね？」

一二三さんが確認するように茉莉の方を向く。

「いえ、アタシも詳しくは知りません。……今年の梅雨に静馬婆ちやんにある手紙が届いて、内容を要約すると、“また籠鳥山の屋敷で人が死ぬ”というものでした。悪戯だろう、ってアタシは思ってたが本当に皆さまがこの屋敷に来ることになって、婆ちゃんも何か胸騒ぎがするって言って……」

「そのような内容の手紙が、いったい、どこから？」

「分かりません、投函されずに直接アタシと婆ちゃんの家のポストに入れられてて」

ということは少なくとも茉莉達の家住所を知り得る人物からの手紙、と見るべきだが、何故手紙なんて届けたんだ？ 誰にも話さず水菱家の人間と使用人だけならもつと楽に犯行が行えるはずなのに、不特定多数の俺や茉莉をわざわざ呼び出すようなことをする理由は？ はつきり言って犯人の意図が読めない。謎が謎を呼ぶ、なんて言葉があるがここまで当てはまる事例つても珍しいだろう。

『――お前ならどうしてそんなことをしようと思う？』

……俺なら、そうだな、誰かに知ってもらいたい。自分の仕業である事件を外に持つていくオーディエンスがいなければ単なる“異常殺人事件”でお茶の間のニュースに流れて終わりだ。芸人は自分の芸で笑ってもらうために人前でコントを披露する。誰にも見てもえなかったら寂しすぎる、って、あれ？ もしかして……。

「誰かに知ってもらいたい、見届けてもらいたいから、だから茉莉ん家に手紙を出した、としたら」

「え、なんですって？」

呟いたつもりの声が太刀音さんに聞こえていたようで思考の海から急速にリアルへ俺、帰還。

「いや、なんでわざわざ茉莉ん家に手紙を出して人の目を増やすような真似をしたんだろなあ、って思いました」

「……それで、僕たちを観客に見立ててこの閉鎖された屋敷に呼び出した、と思うわけですか。面白い見立てですね。普通思いつきま

せんよ、そんなこと」

感心したような顔で朔馬はホワイトボードに今の見立てをスラスラと書き連ねていく。いや、思いつき以外のなにものでもないんだが。

「いくらなんでも突飛過ぎませんか？そんなことをして犯人になんの利点があるんですか？」

「詩織さん、殺人というタブーを犯した大抵の人間に普通の理屈なんて通用しないものですよ。それこそ、“魔が差して殺してしまつた”と殺人犯が自供するように普通の精神状況にない人間にどんな常識が通じるんですか」

「それは……」

「まあ、僕の祖父の受け売りですがね、今は。ともかく、今僕が聞きたいのは何故犯人が茉莉の家に手紙を送ったか、ではなく数年前に起こった事件、なんですが」

ああ、たしか、そうだったな。さて、俺の根拠皆無な見立てで脱線しちまったが本線に戻ろう。かつて起こった事件とやらを誰が話してくれるんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3220/>

学生探偵 碓氷遼馬

2010年10月8日14時03分発行